

宮城県文化財調査報告書第十五集

埋蔵文化財第三次緊急発掘調査報告書

—南境貝塚—

宮城県教育委員会

は じ め に

この調査概報は、土木工事により破壊されるに先立ち、記録保存の措置を図るため、緊急発掘調査を実施しましたが、この調査結果を集録したものであります。

本調査にあたられた塩釜女子高等学校教諭後藤勝彦氏を始め、調査員各位、地元協力者等のご協力に対し深く感謝の意を表します。

昭和四十三年三月

宮城県教育委員会教育長

安 倍 辰 夫

河北町南境貝塚埋蔵文化財第三次緊急発掘調査概報

一、遺 跡 名 桃生郡河北町北境久保四、八、一〇、一一、一二、一四、一五、一六番地 所在 南境貝塚

二、調 査 期 日 自昭和四二年八月 九日

至昭和四二年八月二四日

三、調 査 者 宮城県教育委員会

四、調 査 担 当 者 日本考古学協会員

宮城県塩釜女子高等学校教諭 後 藤 勝 彦

五、調 査 補 助 者 及 協 力 者 白石市小原小学校教諭 後 藤 利 喜 郎

伊具郡大内小学校教諭 斎 藤 良 治

石巻市渡波中学校教諭 木 村 敏 郎

宮城県田尻高等学校教諭 平 沢 英 二 郎

塩釜市塩釜第二中学校教諭 今 泉 武 男

宮城教育大学附属小学校教諭 榎 要 照

宮城県志津川高等学校教諭 芳 賀 良 光

宮城教育大学日本史研究部々員

宮城教育大学学生、 福島大学学生、 明治大学学生

東北学院大学考古学研究部々員

石巻高等学校人文科学部員

六、調査概要

一、まえがき

南境貝塚は仙台湾沿岸貝塚群の中で環状貝塚(馬蹄形貝塚群)に属し、松島湾岸の宮戸島貝塚、大木囲貝塚、西ノ浜貝塚、北上川流域のあの有名な沼津貝塚とともに調査歴のある古典的貝塚である。特に、当貝塚は陸前地方縄文文化後期初頭文化を代表するものとして、当貝塚出土のある土器型式に「南境式」と命名しているほどである。

ところが、昭和四一年八月頃、当貝塚の西側が北上川改修工事にもなつて土取され、地主はこの土取りにもなつて、開田を實行しようとしたが、地方研究者によつて開田による南境貝塚破壊が訴えられ、県教委文化財係が重大視して筆者にその破壊状況の視察調査を委託した。その結果、工事中止、開田計画の延期を説得、重要な貝塚でもあり、その上、貝塚の破壊も貝塚の約半分に亘つていたので、緊急調査を實施して記録保存をすることになり、筆者が担当して発掘調査を實施した。

今回はこの第三次緊急調査についての調査概報である。整理が完全に終つていないので調査経過を中心とした概報とした。

この一連の発掘調査には当貝塚所有地主の日野太郎右エ門、日野勉、日野賢弥、日野拓治、菊地清雄、板橋多門及び河北町教育長阿部 昇一各氏の開田計画の延期など文化財保護への多大の協力と理解があつてこそこのような成果を挙げえたのである。深く感謝申上げる。また、この調査期間中、文化財保護委員会から坪井清足氏の視察があり、種々の指導、助言を受けた。謝意を表す。

最後になつたが、この一連の南境貝塚調査については調査終了と同時に本報告を作成し、調査担当者としての責任を果したいと考えている。

二、貝塚の位置(第一図・写真1)

南境貝塚は石巻市（旧稲井町）南境から桃生郡河北町（旧二俣）北境久保にわたる長軸約二五〇メートルの環状貝塚である。

貝塚は河北町北境久保四〇一六番地にある。詳しくは石巻駅から北に四キロ、河北町二俣中学校より南に同じく四キロの位置にある。標高はほど一五メートルで西に標高一七三・六メートルの南境金山を持つ丘陵が北上川と平行して南北に横たわり、東側には北上山系の南西端、標高三四七・五メートルの籠峰山を後背地に持ち、それぞれの丘陵からのびるゆるやかな丘陵の鞍部に発達したのである。

貝塚はこの鞍部の南北両斜面にあり、それぞれの斜面の前面は標高約三メートルの低地で入江状に水田が開けている。南斜面の前面（南境側）には最近まで沼が現存していたほどである。

現在、この鞍部の低地を飯野川——石巻間の県道が通っており、貝塚は石巻方面からくると右側になるのである。

三 調査の経過とその概要（第二図）

（1）調査経過

昭和四二年の第二次調査

八月九日（晴）

調査区域の草刈、発掘区の設定。春の第一次調査として西側から1〜15、南側からA〜Zの二メートル巾の区が設定してあったので、8トレンチ、9・10トレンチ、12・13トレンチ、14・15トレンチの四発掘区を設けた。この外に、春の第一次調査の時の石組遺構を再発掘することにした。

テントの設置、ベルコンの搬入

八月一〇日（雨後晴）

各トレンチ共に表土剥離作業

8トレンチ、北側のP-Tを中心に掘り下げる。STで混土貝層がある。攪乱層で第一層と呼ぶことにした。この下部に黒土層があり、縄文晩期大洞C₁が中心であり、この黒土層下部より一括土器が八ヶ体分出土した。

9・10トレンチ、LーPの表土が厚い。OーPを掘り下げる。縄文中期大木10式？が出土した。この表土の下部に混貝灰層があり、第一灰層と呼ぶ。骨角器、石器の出土多し。

12・13トレンチ、表土の下に二次堆積と考えられる第一混土層があり、OーPで非常に落ちこみが見られる。この下部の混貝土層を第二混土層とよぶことにした。

14・15トレンチ、LーNで貝層にあたる。第一貝層とする。貝層の傾斜はげしい。

八月二日 (雨後晴)

各トレンチの剥離作業

8トレンチ、QRで攪乱層が七〇〜八〇センチもあり、この下部に魚骨を多量に含む層があり、ついでハマグリ主体の混土貝層、続いて魚骨を含むハマグリ混土貝層となることが判明した。STで黒土層が北に三〇度傾斜していた。出土土器は黒土層の上部で縄文晩期大洞C併行のもの、続いて、瘤突起のある宮戸Ⅲ式、黒土下部では宮戸Ⅱ式併行のものが出土し、その下部のハマグリ混土貝以下は宮戸Ⅰ式のものが出土している模様である。

9・10トレンチ、表土が浅く約二五センチあり、この下に第一混土層第一灰層〔昨日は混貝灰層となっている〕・第二灰層・第二貝層マガキ主体〕・灰層木炭、魚骨を含む層・第三貝層ハマグリ主体〕となる。

12・13トレンチ、前日の第一混土層は上層と下層に分離できた。上層は破砕貝片が多く、黒土がまじり、一般にさらさらしており、一括土器は少なく破片も小さい。炭化物も多い。出土土器型式も晩期大洞Cより宮戸Ⅰ式、更に早期末のものなどまじっている。特に大洞Cの混入などにより第二次堆積ではないかと思われる。下層はP区で深く落ちこむ。黄色の岩くず混入していて、上層とは比較にならないほど硬い。上下層の境界に炭化物が非常に多い。NーOの中間に3個の石によって組まれたピットが検出され、このピットの中から焼土、炭化物が他地域よりも多量に出土した。こんなことから下層面は住居面で、この石紬は炉趾ではないかと考えられた。

14・15トレンチ、12・13トレンチと同じように、第一貝層下に第一混土層があり、この層から石積様の遺構を検出する。第一混土層下は褐色土層が堆積する。第一貝層はハマグリ主体で、バイの混入が特徴的に見られる。

1・2トレンチ、雨のため後藤(利)を中心としてかつて遠藤 毛利氏や楠本氏の発掘区域でS-R区に一メートル巾のピットを設定して、層序の確認につとめた。

八月二日 (晴後雨)

それぞれのトレンチで層序及び遺構の広がりを確認する作業が進められた。

8トレンチ、T区で黒土層か上下層に分離することが出来た。黒土層は最大一・八〇メートルを越えるところさえある。上層は縄文晩期大洞C₁の完形一括土器が多数出土し、下層では暗褐色土となり、晩期大洞B式?併行から瘤付土器が散見する。そして、この黒土層下には魚骨、木炭が多い灰層があり、後期宮戸II式のものようである。

今日からPQ区を調査したが第二灰層その下に第一貝層(ハマグリ主体)があり、宮戸I式の土器片が出土し、またこの下層に灰層が続くようである。

9・10トレンチ、前日の作業の継続であるが、第二貝層下に第三灰層があることが確認された。第三貝層は大木10式併行のようである。

12・13トレンチ、住居面と考えられる層が確認されたので、11トレンチと14トレンチのベルトを取って五〇センチづつ東西に拡張する。

この(14)トレンチの拡張部から新しく四枚ほどの石で組まれたピットがあらわれた。石が焼けていない。このピットの内部から鹿角が出土した。深さは未定であり、このピットの性格はまだ不明である。

14・15トレンチ、石積の検出に重点をおく。この性格は不明である。

1・2トレンチ、S区は攪乱層。したがって南にピットを延長する。PQ区は攪乱されていない。所々に攪乱の部分が見られる。

八月三日 (曇時々雨)

前日と同じような作業の継続である。

1・2トレンチ、2トレンチのPQピットからPR区で純貝層で三〇センチから三五センチあり北に厚く堆積している。層位は表土、貝層、黒土層となる。出土土器は宮戸I式のようである。

8トレンチ、RST区の掘り下げ継続する。第四層(第二貝層)までの作業である。

9・10トレンチ、O区での第二貝層と第三貝層はP区では一緒になって切れてしまう。続いて第三灰層を剥離する。魚骨、木炭、遺物多し。骨匕、離頭鈷、釣針、棒状角器、石鏃、土錘多数である。

12・13トレンチ、石組遺構の広がりを見るため、14トレンチと連続する。炉址と考えられた石組の西側に柱穴様のピットが四個ならぶ様である。こう見てくると南北ほぼ四メートルほどの住居址になるのではないかと考えられた。

層位はP区で第一貝層まで、L区では表土、シジミ貝層、第一貝層(ハマグリ主体)、破砕貝混入黒土層となる。この第一貝層は縄文中期末大木9〜10式に併行する層のようである。破砕貝混入層は条痕文等繊維を含んだ早期末の型式のようであるが不明である。

14・15トレンチ、14トレンチは斎藤調査員担当の住居址関係調査のため残し、15トレンチを中心に剥離する。その結果、新しい何層かの層位を見だしたので、トレンチ担当者で検討して、MN区で今まで褐色土層と呼んでいたところを、第二貝層、第二混土貝層、第三貝層、第三混土貝層と細分することにした。

八月一四日 (小雨後曇)

本日は雨のため既設のトレンチが調査出来ないのので、1・2トレンチと8トレンチの間の牧草地に3・4・5・6・7トレンチを新設し、各MNOとPQRSとし南に四区画を設定、調査責任者をきめて表土剥離を実施する。

12・13トレンチ、南に二区拡張して黄色ロームまで掘り下げる。変化がない。

八月一五日 (曇時々雨)

今日は休養日である。調査の中間報告会を開き、調査の問題点、計画など討議。

八月一六日 (曇後晴)

今日からまたもとのトレンチを調査する。

8トレンチ、第一貝層(第四層)〔ハマグリ、シジミ、カキ等〕の剥離で終る。貝層の傾斜が急で宮戸I式併行の完形土器が一メートル以上も広がって一個体分出土した。

9・10トレンチ、第三貝層下の第三灰層は上層と下層とに分離される。そして、この下部に第四貝層、第四灰層があり、続いて、厚い第五貝

層があり黒土層、黄色ローム層となることがわかった。出土土器型式も第四貝層は縄文中期大木10式、第五貝層は大木9式併行である。

12・13トレンチ、遺構の性格を検討するため、ピット、壁面と考えられる3ヶ所を精密に検討する。特に、(14・15)トレンチの赤ニシ石積遺構と住居址との関連は後日にまわされた。

14・15トレンチ、15トレンチのL・N区、第四貝層と第三混土貝層に石積と赤ニシが特徴的に広がりを見せる。そこで、午後これを検討すべく16トレンチのMN区を新設し、石積遺構の広がりをしらべる。

八月一七日 (晴)

12・13トレンチを除いて、各トレンチとも層位を早く確認するよう作業を進める。

8トレンチ、トレンチも一番長く、それに深いようである。今日は第一貝層第四層以下の褐色土貝混入層第五層から第二貝層第六層、黄褐色層第七層を剥離する。P区の七層では焼土の間層がある。

9・10トレンチ、層位は一応確認した。全体的に剥離が進められた。第四貝層と第四灰層は完全に大木10式併行のものが出土している。

14・15トレンチ、L・O区の剥離。Nで第四貝層が消滅するが、MNで多くの赤ニシが出土した。この赤ニシと石積はどんな性格のものだろうか、附近に獣骨(頭骨)なども多い。

八月一八日 (晴)

層位の確認と遺構の実測図及び壁面の実測図の作成。また、貝塚の広がりを検討するために、20トレンチ及び30トレンチを設定して調査する。

8トレンチ、RS区の第五層、第六層にある焼土層を剥離する。二〇センチもある。焼土層内にあるハマグリは焼けて灰色に変色している。長時間焼けたことを証明するものであろう。

第三貝層第八層まで進む。第一貝、第二貝、第三貝の各貝層がST区で一緒になってしまう。

9・10トレンチ、各区全体剥離をいそぐ。特に、KL区の第五貝層下に大木9式の一括土器が多数出土する。全体として剥離調査の完了が間近かである。出土器の中でオール状の鯨骨器が出土した。何に使用されたものか。

12・13トレンチ、住居面の整理と遺構の実測図作成。

14・15・16トレンチ、東壁面の実測図作成。

20トレンチ、14・15トレンチより東の豆畑に2×4のトレンチを設定する。南からI、II区とする。I区の南よりには少々貝が見られるが、外の部分については等められない。黒土層で遺物も薄手の縄文晩期大洞C₁式である。

30トレンチ、1・2トレンチの西側下の豆畑に2×4のピットを南北に設定する。石積が出土する。土器の出土は少ない。宮戸Ib式併行のようである。午後に石積を露出するために東に2×4メートルを拡張して石積遺構を検出する。南より猪の完全な頭骨が二個出土。また、石積の中から石斧が二点出土した。

八月一九日 (晴)

作業は前日とほぼ同じ、たゞ、本日、文化財保護委員会の坪井清足氏、県社会教育課村上、志間西氏等の視察があった。

1・2トレンチ、M区で第一貝層、灰層、第二貝層と新しく区分され、その上、この灰層を境に出土土器に変化があり、第一貝層は宮戸Ib式、第二貝層は大木10式のものである。

2トレンチRS区で一・七メートルと一・五メートルの範囲に焼土の堆積があり、厚さも二〇センチほどあり、焼けた貝殻多数検出された。8トレンチ、N-R区の第三貝層(第八層)まで剥離する。たゞし、NO区は黒色土層(第九層)まで剥離する。たゞ、この第八層と第九層の間には魚骨の間層があり、この魚骨層は厚いところで四センチにもおよぶ。小魚骨である。

9・10トレンチ、特に、第五貝層下の一括土器、KL区で午後に、三七個の一括土器を取りあげる。また、NO区でも第四貝層の剥離作業が進められる。口縁部を下にした一括土器の出土が多い。ON区で朱彩された石が二個出土した。石そのものに彩色したのか、それとも二次的なものなのか不明である。

12・13トレンチ。壁面実測図、遺構の実測図作成。

14・15・16トレンチ。石積遺構の実測図の作成。

30トレンチ。石積の露出。石積の範囲はかなり広く、約四メートル四方に広がっており北側に傾斜している。

八月二〇日 (雨後晴)

調査が終末段階に入ったので層位確認の遅れているトレンチの剥離作業に全力をそそぐ。実測図の作成。

8トレンチ。全体的に第八層、第九層を掘り下げる。ただし、N区で黄色土層(第二〇層)から第四貝層(第二一層)を剥離する。

(9)・(10) トレンチ。KL区の第五貝層の一括土器の取りあげと貝層の剥離作業。この第五貝層下の破砕貝混入黒土層はM区で消滅し、黒土だけとなる。第五貝層は縄文中期大木9式であり、破砕貝混入層は繊維土器が散見する。O区の朱彩された二個の石を各石群の図をとる。

12・13トレンチ、住居面と考えられた面の北よりの石組は人骨に関係したものと考えられるようになった。そして、人骨周辺から晩期大洞C₁の土器が出土している。住居遺構についての年代は大木10式以降のものであろう。このことは、住居面と考えている層の下層II第一混貝土層IIは宮戸I式に併行していることから十分証明される。

15・16トレンチ、引続き石積遺構の実測図作成。

八月二日 (曇)

8トレンチを中心として調査を展開する。また、住居面を掘り下げ開始。

8トレンチ、本日なつてやっとトレンチの層位を確認することが出来た。第四貝層第一層から黒土層第二層の剥離に集中する。第九層と第一〇層の間に薄いハマグリ貝層が入って区分されることが判明した。

(注記 実際は第一層の第四貝層で作業は終っているが、昭和四二年三月に第二次調査があつて、8トレンチが調査されて、第五貝層当時の第二貝層の存在が判明していた。したがつて、この調査経過の8トレンチの第五貝層については記録されていない。第五貝層は大木9式中心の貝層である。)

9・10トレンチ、壁面の実測図作成。

12・13トレンチ、剥離作業を進める。各層の名称を変更する。(下段参照)

14・15・16トレンチ、褐色土層には、四五センチ四方に木炭層があつて、クルミの炭化したものが出た。土した。

また、13トレンチの石組遺構(貯蔵庫用のもの)の東側に石棒状の石組みが検出された。貯蔵庫用石組との関連、石棒状の石組の意味するものなど不明である。

15・16トレンチはLM区の石積遺構で土器、骨類をとりあげる。一括土器が十五個分とりあげる。この一括土器の内部から石鏃が検出された。

12・13トレンチ

旧名称	新名称
第一混土	黒土層
第二混土上	第一混土(住居面)
第二混土下	第一貝層 第二混土
第一混貝層	第二貝層

1・2トレンチ、壁面の実測図作成作業。

八月二日 (曇時々雨)

実測図の作成と12・13・14トレンチの剥離に全力をあげる。

12・13トレンチ、第二貝層、第四貝層と二貝層の存在が確認された。特に、第四貝層の上部はシジミで下部はハマグリの子体の貝層である。この二貝層ともに大木10式のようなものである。

8トレンチ、実測図作成

30トレンチ、埋戻し作業

八月三日 (晴)

12・13・14トレンチに集中して作業を進める。明日で作業終了である。20トレンチは埋戻し、14トレンチは西壁面実測図を作成する。

八月四日 (晴)

12・13トレンチ、壁面実測図の作成。3-7トレンチの埋戻し、今回も未調査地域が残る。遺跡の撮影、遺物の荷造り、ベルコン運搬、宿舎の後かたづけ、五時、現地で南境貝塚発掘調査団を解散する。

調査は完全に終了しなかつたので、追加調査を後日実施することにした。

(註 一月〜二月にかけて、南境貝塚の追加調査を実施した。)

(2) 調査概要

要するに今回の第二次調査は河北町側Ⅱ北境側Ⅱの畑地の開田にともなつての緊急調査であり、北境側の遺跡を記録保存のため、全掘することになった。

調査は緊急調査という性格から限度があるが、能力、労力のあるかぎり遺物の収集、遺構の検出に努めることにした。特に、次の

1 各文化期の編年学的研究

2 各種遺物の集収と遺跡との関連

3 遺構の検出と検討

などを柱として努力した。したがって、トレンチは二メートル巾とせず、出来るだけ巾の広いトレンチ(四メートルを単位)を設定した。

8 トレンチ第三区、写真2・3

巾二メートル、南北四〇メートルの大トレンチである。このトレンチの設定の目的は開田される北斜面の堆積状態を明らかにして、各文化期の編年と堆積の内部状態を検討するもので、本調査の中心トレンチである。

貝の堆積はJ-Tまでの二メートルもあり、トレンチの最深部で二・八〇メートルにおよぶのである。したがって、このトレンチの層は五層もあり、堆積は相当複雑である。また、遺物の保存も極めて良好で、その量も豊かである。このようなことから県内遺跡として、学術上極めて貴重な貝塚といわねばなるまい。

堆積の状態は、表土、続いてST区の上層部は貝の堆積なく、黒色層の遺物の少ない攪乱層があり、薄手の土器が多い第二層の黒土層が二〇センチほどある。しかし、西壁面ではこの黒土層が上層、下層に分離される。出土土器に変化がない。そして、この下層は木炭、魚骨などを含んだ灰層で色調も褐色層がSTを覆っている。そして、上層の黒土層と層位を区分しており、出土土器にも変化が見られる。やっと、R区で第一貝層である。

貝層はハマグリ主体で七層検出され、貝層間には灰層、魚骨層、黒色有機質層等六層もある。

第一貝層は木炭、灰の混入が多く六〇センチも堆積しているところがあり、第二層褐色土層とは出土土器も違がつて層位が明確である。続いて、第二貝層、第三貝層が堆積するが、特に、第一、第二貝層とも互流するRS区では赤褐色の焼土が厚さ五〇センチ、東壁南北二メートルに広がる。この焼土層の貝殻は焼けて灰色に変色している。MP区には第四貝層第一層がありMN区では八〇センチに及ぶところさえある。この第四貝層までの間には、第二貝層下の黄色土層第七層までは沈刻線を主体とした土器群が出土しており、第三貝層第八層とは明確に層位を分けているようである。そして、第三貝層Ⅱ〇-R区Ⅱから第四貝層までは陵線を主体とした土器群が出土している。

特記すべきことは第三貝層にはほゞ一〇センチの魚骨層がある。この魚骨は壁面観察によると、スズキ、タイ、マグロ等の魚群でなく、小魚群の骨が堆積して黄褐色を呈していることである。これは漁法を考える手懸りとなろう。

第四貝層下にはやゝ薄い、灰まじりの混貝土層があつて、KL中心に第五貝層が堆積している。(調査経過で註記してあるが第五貝層は本調査以

前に調査したもののこの第五貝層は第四貝層よりも古いと考えられる渦巻き隆線を中心とした土器群が出土し時代を異にしている。この第五貝層下には黒色土層があるが、しかし、K L区ではこの黒色土層には破砕貝が混入し、出土遺物は少ないが、土器の胎土に繊維を含んだ早期末の土器群が存在するのである。Iから南の地区は貝堆積なく、黒色土層の下は次第に黄色土層に変化して行き、遺物の出土もない。

こうして観察すると、8トレンチは上層から黒色土層の二層位、貝層中は三層位、下部黒色土層の層位、都合六つの文化層を認めることが出来るのである。模式図を示すと次のようになる。

8 トレンチ層位模式図

表 土		
第1層	(撓乱層)	
第2層	(黒色土層)	上層 下層
第3層	(褐色土層)	
第4層	(第1貝層)	大洞 C ₁
第5層	(褐色灰混入土層)	大洞 B ? 宮戸 II・III
第6層	(第2貝層)	宮戸 I b
第7層	(黄褐色土層)	
第8層	(第3貝層) (魚骨層)	
第9層	(黒肉土層) (貝層)	大木 10
第10層	(黄色土層)	
第11層	(第4貝層)	
第12層	(灰混土層)	
第13層	(第5貝層)	大木 9
第14層	(破砕貝混入黒色土層) (黒土層)	織土 雑器
第15層	(黄色土層)	

9・10トレンチ

中四メートルと二メートルのトレンチであるが実際はトレンチの西側が農道なっており、境界でもあったので七五センチのベルトを設定する。

貝層は五貝層あり、8トレンチとあまり大差がない。特記すべきことは第四貝層と第五貝層下部から一括土器が夥しく出土したことである。

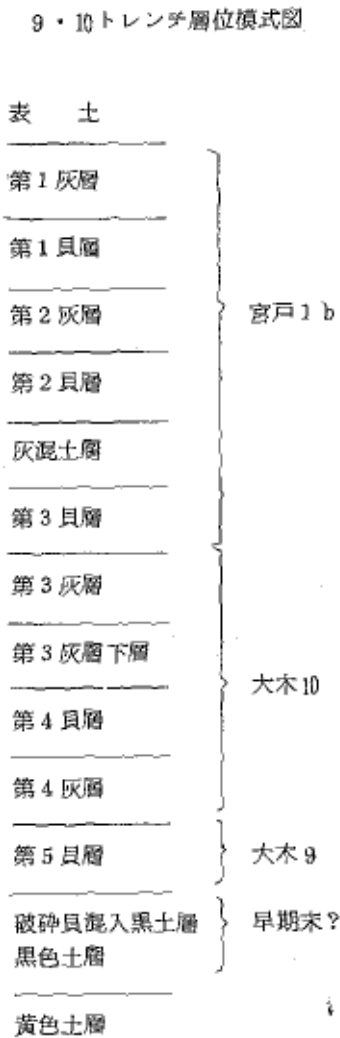
トレンチ西壁では第二貝層はマガキが比較的多く、下層はハマグリが主体であるが、東壁のように識別が困難で分離できない。

12・13トレンチ第4図、写真5・6・7

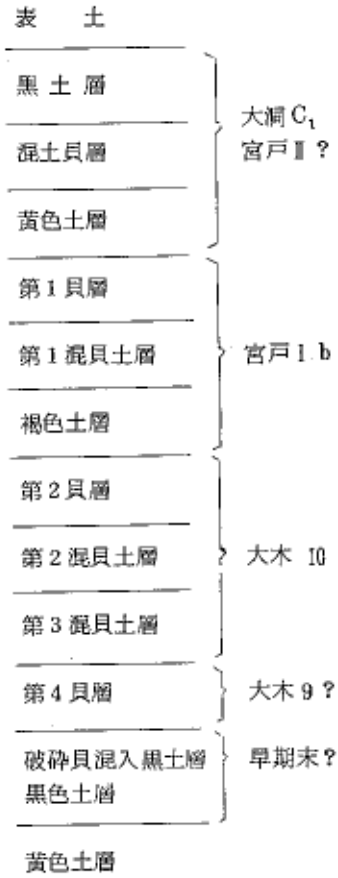
9・10トレンチと同じ設定である。たゞ、調査途上において、石積遺構、石組遺構(住居址の炉址?)等の検出があり、昭和四二年三月、第二次調査の11トレンチとの境である約五〇センチのベルトをとり11トレンチと接続し、又、東側の14・15トレンチの境界をなしていたベルトをとり、O-N間を連続させた。

堆積は9・10トレンチとほぼ同じであるが、第四貝層までは層も薄くなる。だゞ、第五貝層が東壁でL-Pまでにわたり、この貝層の広がりを示すものであろう。また、この第五貝層上には、9・10トレンチでは見られなかったシジミ貝層約二〇センチが堆積し東側に広がっていること、同じように破砕貝混入黒土層も東側に広がる。

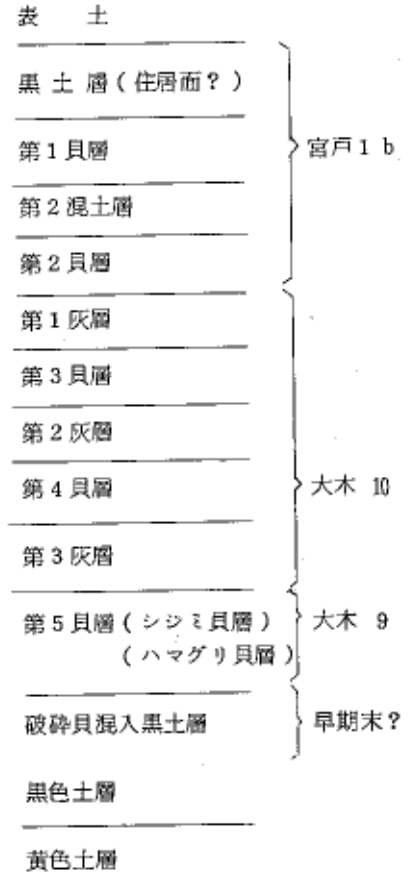
このトレンチ、最大の成果は、第二混土層下層が上層に比して硬いこと、この境界には炭化物が多いなど、住居の床面と考えられるし、11トレンチ側より三ヶの偏平な石で組まれた石組みが検出され、このピットから焼土、炭化物、焼けた土器片等が出土、炉址と考えられる。また、14トレンチ側には細長い石で組まれた深さ四〇センチ、直径四〇センチのピットが検出され、その内部には鹿角が入っていたことなどから、貯蔵庫と考えられた。その他、この石組ピットの東側には石棒状の細長い石での石組遺構が出土したことである。その上、トレンチ西側へりには柱穴様ピットが五ヶあり、南側には壁面と考えられるものがあり、こんなことから住居址と考えられた。ただ、東側は貯蔵庫用石組遺構以外は住居址と考えられる証拠はない。また、12トレンチの北側は黒土層が急激に落ち込みがあり、この黒土層中より玉石などによる石積遺構が発見され、トレンチ北端(落ち込みの線)で人骨(頭骨片)が出土した。そうするとこの石積遺構は墓地と考えた方が妥当となってくる。住居地の内部に墓地が営まれたことになり、西側の石組



14・15トレンチ模式図



12・13トレンチ層位模式図



14・15・16トレンチ(写真4)

が炉址であるという考えも薄れてくる。こんなことから、この遺構は住居址とすぐ考えないで、現段階では遺構々々、個々のものと考えておいた方が妥当でないかと考える。こん後、検討して結論をだしたい。

堆積は12・13トレンチと大差なく、次に図示した模式図の通りである。

このトレンチでは第三混土層から第四貝層中に発見されたアカニシ混入石積遺構がある。この石積は東西約三メートル、南北約二メートル範囲にわたり、アカニシは殻頂が破壊され、なかには貝輪未成品様のものが積まれ、所々に鹿等の獣骨も散在している。また、土器も多く、梢々中央部には口縁部が外反し、研磨帯があり、体部に複節(?)縄文が施文された土器が横倒しの状態で発見された。この石積遺構の性格は…。

20・30トレンチ
貝塚が構成されている丘陵下の遺跡の状態を調査するために設けたピットである。

20トレンチは黒土層のみで貝散布なし、しかし、遺物、特に土器の出土が多い。縄文晩期の大洞C₁式併行ぐらいの土器である。おそらくこのような状態で道路まで続くのだろう。

30トレンチも黒土のみであるが、15・16トレンチで発見された石積遺構と同じように、東西約四メートル、南北約五メートルの範囲に石積遺構が発見された。この遺構はピット南がわに、巾二メートル位は獣骨、土器が多く、北側は大部分が石だけである。獣骨も猪の頭骨がほぼ完全に検出されたことであり、15・16トレンチで発見された石積遺構と性格が似ていると考えられる。

(3) その他

1・2トレンチは調査トレンチと違って、昭和四二年八月の第一次調査と似て、堆積層が少なく、浅い状態で貝塚が東側に傾斜していることを示すのだろう。

前述もしたが、2トレンチRS区で広い焼土層の堆積があったことは8トレンチと同じである。また、このトレンチは所々に攪乱層が見られるのも特色であろう。

117のDE地区には昭和四二年三月の第二次調査で石組遺構が発見された。どこまでが人工的なのかよくわからない。たゞ、人工物として石皿の残片と大木9式位の土器の一片だけであった。今回はこの性格を考えるための調査と遺構の範囲をきめるための再調査であったが残念ながらよくわからなかった。

以上が調査経過であり、調査概要である。

四、出土遺物の概要

発掘調査が広範囲にわたったことと、予想以上に堆積層が厚かったため、その出土遺物の量も豊富である。そのため整理もまだ進んでいない。出土遺物の説明にしても混乱をまねくおそれがあるため、整理の現段階での認識とし、特徴のあるものにとどめたい。主な出土遺物の概数は次の表のようになっていて、遺物の点数も今後の整理の進行によって多少の増減がある。

土製 品

品名	数量	備考
○ 縄文土器片 縄文土器完形品	ダンボール 103	
○ 土 偶	5	昭和43・3・15現在
○ 土製耳飾	7	環状耳飾 4点
○ 有孔円盤状土製品	1	
○ 土製垂飾具	2	
○ 土 錘	124	1点は円盤状に焼きあげたもの。他は縄文土器片を研磨したもの。

貝牙製 品

○ 貝製輪	29	イタボガキ製 内アカガイ3点 アカニシ2点
○ 牙製輪	8	

石製 品

○ ○ ○ ○ ○ 石 石 石 擬 石 石 匙 鐵 錐 斧 斧	9 16 7 14 13 4 1	横形 1点
--	------------------	-------

自然遺物については整理が終わっていないので記載を省略するが、仙台湾沿岸諸貝塚出土と大差ないことを附記しておく。

1. 土 製 品

(イ) 縄文土器 (第五・六図)

出土遺物の八〇%縄文土器片であり、各文化期の編年的研究が調査の一つの柱であったし、8トレンチがそれを目的としたトレンチであった。調査概要で各トレンチの模式図でも示してあるように、トレンチによって堆積が多少の違いがあるが、層位が四乃至五つ確認され、時代の差異を認めることが出来る。(8トレンチ模式図参照)以下、下層から順次その概略を説明しよう。

(一) 破砕貝混入黒土層出土土器群 (第六図1)

所謂、繊維土器である。出土量は極めて僅かである。小破片が大部分で全体を知ることが困難であるが、口縁部は稍々外反し、口唇部に刻目のあるものもある。体部の状態よくわからない。底部が一点、底部に近い部分一点から考えると、尖底である。文様は斜行縄文が施文されており、ある表面採集品には羽状縄文の施文されたものも存在している。撚糸文の圧痕、裏面に縄文されたもの、絡条体圧痕文の施文されたものもある。裏面には条痕、擦痕によって器面整頓されている。繊維混入多く吸水性が強い。

(二) 最下部貝層中心出土土器群 (第五図、第六図3)

渦巻施文が特徴である。大別して、隆線文施文土器群と沈線文施文土器群となる。どちらにしても、口辺部に研摩帯があつて、その下部の文様帯と区画されるのが特徴である。口縁部は平縁と波状口縁とあり、直立か稍々外反し、口頸部でしまりがあり、胴部でふくらむ深鉢形が基本である。

第五図1〜4のように隆線も沈線も口辺部を基本として懸垂文となつて土器全体に文様が展開する。なかには、口縁部に単独の大突起のもつものもある。これらは大木8b式に見られる突起の発展、発達したものであろう。

第六図3のように口唇部土面に朱彩されたものもある。

底部は大部分が無文であるが、網代底、葉文底もある。

(三) 中部貝層中心出土土器群(第六図、写真10)

隆線施文の土器群は少なくなり、磨消手法の発達した渦巻はなくなる。僅かに隆線帯となつて、その伝統が残る。沈刻線文が盛行し、沈刻線によつて施文された卵形の文様、懸垂文様から発展し、沈刻線で囲まれたU字形、コ字形の磨消帯、縄文帯が盛んに使用される。

隆線施文のものも松島町西ノ兵貝塚Aトレンチ下部貝層出土土器と似て、口頸部に一条めぐらされ、この下部にコ字形の磨消帯がある。胴部のコ字形磨消帯下部に鮎状の陵帯があつて、この鮎状と口頸部の隆線に刺突文が施文されているものもある。この外、擦痕状の施文されたもの(五図6)も存在する。

この土器群は口縁部が直立するのが大半で底部は口縁部直径に比して大きい。深鉢形を基本とするが、六図2のような糸通し穴を持つ壺形状の土器は珍種である。

(四) 最上部貝層中心出土土器群 (第六図7・8、写真11)

このグループは沈刻線施文群である。この土器群にも前述した隆線が口辺部に一条残るものがあるが、ごく稀れである。文様は口辺部の一条の沈線(隆線)から幾何学的文様や渦巻文、渦巻文の退化した文様が懸垂した状態に施文されるものもある。ボタン状突起、または刺突具による凹部もある。口縁部の突起も小さくなり、波状口縁の突起のようになり退化するが、ここに渦巻が施文され、裏面にも渦巻やS字状の沈刻がなされる。縄文が大半を占めるが、撚糸の回転施文が多くなる。器形も小形が多くなり、器形も分化する。

(五) 最上部黒土層出土土器群 (第六図9)

時代的には二・三型式のものが混在しているが、縄文晩期中頃のものである。薄手で羽状施文の土器が大多数である。器形も分化し、小形土器も多くなり、精粗の区別も明瞭となる。文様も非常に単純化し、口頸部に条線化して集約される傾向が強い。

以上概括的に五群に分類して説明したが、どこまでも暫定的なものであることを附記しておく。

(ロ) 土 偶

全部破片である。四点(8)トレンチ黒土層出土で晩期大洞C₁式に併行するものであろう。特徴的なのは下半身のもの脚が開脚した状態で、腹部に

突起が一つあることである。

9・10トレンチ第三灰層出土の手の部分があるが、これは竹管文が数条施文されたものである。大木10式に併行するものである。
(ハ) 耳飾 (写真13)

三点が滑車形の耳飾で大木10式併行のものである。中央部に小さい穴があげられ、内二点は表裏共に竹管文が施文されているものである。

○12 13—P—2貝||直径五・一センチ、厚さ一・一センチ

○10—N—3灰||直径四・七センチ、厚さ一・七センチ

○14—N—2貝||直径五・五センチ、厚さ二・四センチ

(二) 土製垂飾具 (写真13)

槍先のような形態をしており、長さ七・九センチで根元の部分に二穴ある。これに糸を通してつるしたものでだろう。(9・10—N—4貝)

他の一ケは不整形のもので長軸五・三センチ、短軸四・一センチで、竹管文によって装飾されているものである。(14—0)

2. 石製品 (第一二圖)

(イ) 石斧 (第一二圖5、8、写真16)

6・7のように二次的に利用されたものもある。

(ロ) 擬石斧 (第一二圖9、13、写真17)

多数の石斧の出土とともに特徴的である。それは、小形に石斧状の形態に研磨整正したミニチュア石斧が存在することである。最小のものは約二センチ、厚さは一ミリである。何に使用されたものか、中には穴があげられ、垂飾具のものもあるようだが…。

(ハ) 軽石製浮子 (写真18)

糸通し穴があり浮子として利用されたのはたしかである。型態的に二型式に分類出来る。縦型のもの、即ち、糸通し穴が一ケのものである。これも、短冊形と丸形とある。もう一つは横型のもので糸通し施設が二ヶあるものである。これらは、一本釣の浮子とは考えられず網漁法の浮子であることはまらがないだろう。また、縦型でも非常に大きく長軸二二・八センチに及ぶものもあり、これも前述の網漁法に使用されたもので

らう。

3. 骨角製品 (第七・八・九・一〇、一一図)

(イ) 銛 頭 (第七図1~12)

所謂、古式離頭銛が大部分である。9を除いて索孔のあることは共通したものである。型態的には1~4までのよう銛的機能を果たす型態。次は5~8までのような一方の茎が薄くなって二分され、逆刺の機能を持つようになる型態。12は型態的に見て11への橋渡しをするような中間型態(茎が完全に独立)と見なすべきである。10はおそらく二次加工によるものだろう。11を除いて大木9・10式から宮戸Ib式併行のものである。11はそれより新しくなる。

(ロ) 釣 針 (第七図13~19)

錨型の釣針が予想より少なかった。型態的には、13~15の小型と16~19の大型(中型かもしれない)に分類出来るし、逆刺が内側に付いたもの、外側についたものとある。特に、18・19のように曲りが軸に対して角度を持つもの(鋭角のもの)と、16・17のように曲りの部分が太くて、軸に対して角度のあまりもたないもの(鈍角のもの)、フトコロの広いものに区別出来る。製作材料のためなのか、魚種の違いが考えられるだろうか。しかし、釣針の大小や錨形の違いは魚種の違いと見てよいだろう。

(ハ) ヤ ス(簞) (第八図1~5・13、写真19)

骨鏃と固定銛とどちらに入れたらよいのか不明なものさえある。索孔・逆刺のないもの、比較的長いものをこの仲間として分類して見た。3~5のように軸部にアスファルトの付着したものがあし、1・2のように先と軸を区分したものもある。特殊なものとしては、エイの骨を利用しアスファルトの附着したものもある。2・13のように軸にそがれた部分のあることは組合せのものだろう。

(ニ) 骨 鏃 (第八図6~12、写真19)

11・12のように、ペン先状の鏃が特徴的である。

(ホ) 骨 針 (第八図17~22)

頭部に索孔がある。飾りのついたものもありヘアピンとして使用されたものもある。

(ハ) 不明骨角器 (第八図15・16、写真19)

形の完成したものであり、何等の機能を持ったものであるが、その用途は不明である。

(ト) 骨 ヒ (第九図)

細身のものが多いため、骨ヒというより骨針といったほうがよいかもしれない。特に、1・2は先端に糸通し穴があるので網針がなんかに使用されたものである。

材料から見て、獣骨二つ割りして製作したものが大部分であるが、5・6のように単独の材料から一つ一つ製作されたものもある。形態的に分類すると3・4のような間接の部分を残した形態、8・9のような有孔の形態、5・6・8のように細身の形態、7のような使用材料の違いから独得な形態とに分類できる。所謂、骨ヒはない。

(チ) 棒状角器 (第一〇図)

この骨角器の機能はよくわからない。たゞ、鹿角をさき割って研磨し棒状に仕上げたものであり、一面は鹿角の自然面が残されている。このように先端が細く削られ、角度をもった傾斜に削られたものが発見されたことから刺突具の機能を持つものがある。また、先端部に刻みを入れて加工し区画したもの、摘みのあるもの、及び有孔のものなどがあり、機能は複雑である。また、この棒状角器には、あるきまった長さを持ったものがあり、長さでも二、三種類に分類することが出来るのである。

(リ) 魚骨製垂飾具 (第一一図1〜4、写真21)

スズキの鯉蓋主骨を利用したもので、図1でわかるように二つ乃至三つの穴があげられ、この穴をあけた部分は必ず打ちかいて真直に整えていくのが特徴である。

その他各種の人工遺物があるが省略する。

五、考 察

調査概略で説明したように整理途上であって、種々の課題、疑問、検討しなければならないことがあって、うかつに結論めいたことは言えない。そ

ここで、調査、整理途上で問題になっていることを箇条書に挙げて若干の私見を加えることにする。

① 私達が調査した範囲内と現段階では、前述の模式図が参考になるが、最上層の堆積に多少の違いがあっても、各トレンチ共に大筋に於ては四一五つの層位を確認することが出来た細分されるかもしれない。それらは、文様施文、形態、器質等の諸特徴から考えて、

(イ) 最下層黒土層出土の土器群は早期末の船入島下層式周辺に併行するものと愚考している。それは、羽状縄文、撚糸文の施文である。たゞ絡状体圧痕文の施文されたものもあり、裏面に縄文施文のものなどが存在するため、多少時代の古いものも存在するようだが、なにせ資料不足で不明である。

(ロ) 最下部貝層出土の土器群は縄文中期大木9式併行のものであることはまちがいない。残念なことに大木9aと9bに細分しているが(1)、これが妥当かどうかは現段階ではわからない。考え方によってはいくらかでも細分出来るが、それが型的に位置づけが出来るかどうかわからない。

(ハ) 中部貝層出土土器群は中期大木10式である。たゞ、松島町西ノ浜貝塚Aトレ下部貝層②の土器群とは多少の違いがあるようだ。地域差なのか、鱗状の陵帯を持つ土器群が少ないようなのである。西ノ浜は前述の土器群が圧倒的に多いのである。厳密に見ると宮戸島貝塚梨木圃地区出土のものと同西ノ浜出土のものとも多少違いがある。現段階では観測的予報を出さないが、西ノ浜貝塚出土の土器群の位置が問題になってくるのではないか。

(ニ) 最上部貝層出土の土器群は宮戸1b式に併行するものである。

この外、(ホ)上部黒土層出土の土器群はその詳細は不明であるが、その最上層が晩期大洞C1式に併行することだけは確実である。

② 石積遺構・石組遺構が検出された。石積遺構の確実な30トレンチ、15・16トレンチ、12・13トレンチの三遺構である。それぞれ、A・B・Cと命名すると、Cは人骨頭部破片の出土から墓地としての埋葬施設と考えられる。しかし、A・Bについては不規則な積石でAは完全な猪の頭骨が二ヶ出土していること、Bはアカニシが積込まれていることから、宮戸島貝塚台圃地区のCトレンチの石積遺構(3)と性格が似ているものでないかと考えられ、狩鋪のさいの儀式Ⅱ祭場のあとではないだろうか。

時代はAは後期初頭(宮戸1b式)であり、Bは中期末(大木9・19式)に相当する。Cだけが晩期大洞C1式の埋葬施設であろう。

石組遺構については、発掘途上において、住居址ではないかと考えられた。遺構内にある石組でその性格を考えるために種々の議論がある。それは住居に附属した遺構と考える考え方と、住居と別な遺構とする考え方の二つである。現段階としては住居址に附属した石組遺構と考えることは調査

概要で説明したように否定的要素もあるので考えないで、単独の貯蔵庫石組遺構としておきたい(将来訂正もありうる)。いずれにしても生活遺構の発見は大きな成果である。

③ 銚、釣針、土錘、浮子その他漁撈用具多数出土したことは漁撈活動が活発であったこと、特に、動物遺存体の魚骨類が多く、また、魚骨層をなすほどである。このことは、離頭銚や釣針、簞などの漁獲法Ⅱ沿岸棲魚のマダイ、クロダイ、フグ、スズキ、エイ類など、また、沖合回遊魚のマグロ、カツオ、サメ、イルカ等Ⅱだけでなく、軽石製浮子の横型や縦型でも特大のものが存在することによって網漁法の発達を考えねばならない。特に、中期末の西ノ浜貝塚も顕著であったが、土製錘がおびただしく発見されていることも、機能が錘であれば理解しやすくなるのである。

註

(1) 林 謙作 「日本の考古学Ⅱ縄文時代―東北―」

河出書房 昭和四〇年

加藤 孝

(2) 後藤 勝彦 「埋蔵文化財緊急発掘調査等報告」

宮城県文化財調査報告書第一三集 昭和四二年

斎藤 良治

(3) 斎藤 良治 「宮城県鳴瀬町宮戸台団貝塚の研究」

宮城県の地理と歴史 昭和三五年

林 謙作

「前掲書」

(4) 林 謙作

「前掲書」

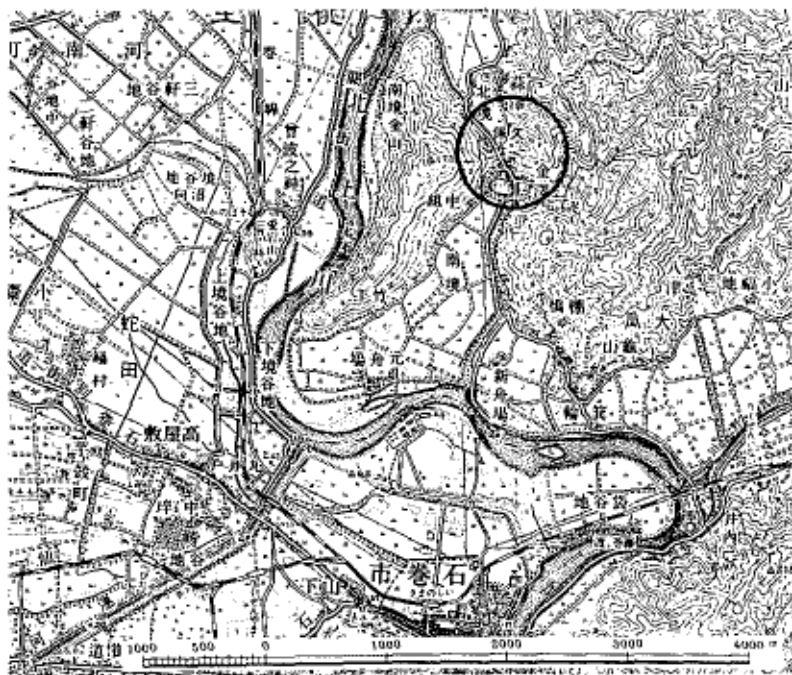
六、あとがき

今回の調査で陸前地方縄文文化中期末の編年が明確にされるということ、各種遺構の発見は南境人の生活を考える上に寄与するところ大であった。また、漁撈用具が多数出土したことは、陸前地方の漁撈活動の研究が遅れている今日、研究活動に大きな影響をあたえることであろう。

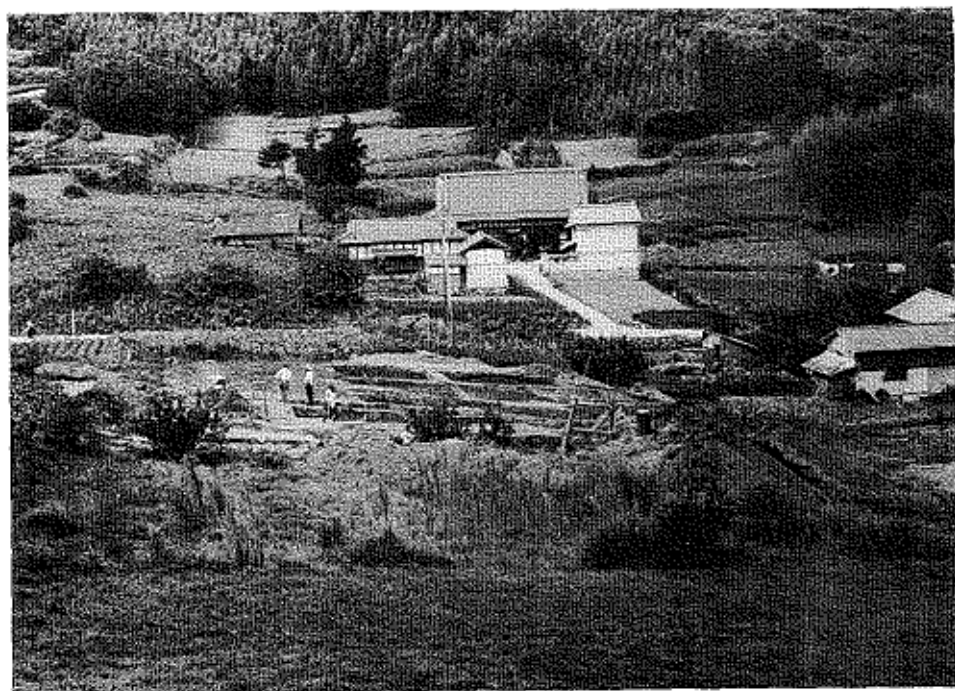
最後に、緊急調査のあり方についての提言である。文化財行政について種々の問題などが絡みあって、複雑ですぐ解決されるとは考えないが、破壊される運命にある遺跡は緊急調査で遺物の収集、記録保存をなすという方法だけでは、今回のような古典的、学術上重要な遺跡が次から次へと消滅して行くことだろう。調査さえ実施すればというのではなく、その段階以前に強力な組織を利用して指導、保存保護の手だてがなわいけでない。吾々は最大限、遺跡を保護することが基本態度でないだろうか。

付 記

実測図の作成にあたっては阿部恵、白鳥良一、小井川和夫各君の協力があつた。



第一図 南境貝塚付近図
○印の中心が貝塚を示す。(石巻, 5万)



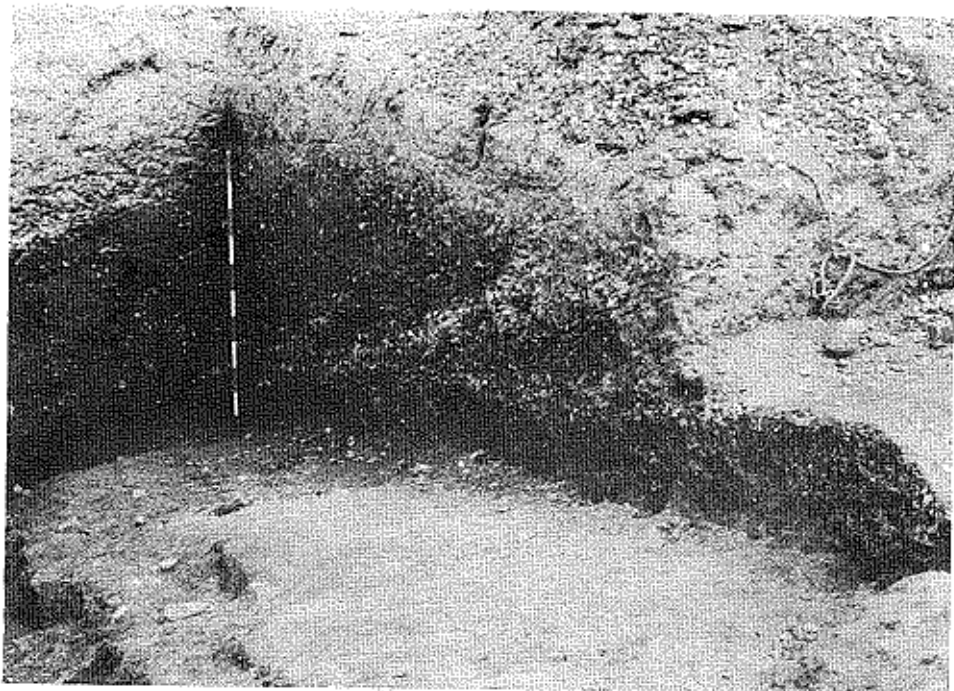
1. 貝塚を東側より望む



2. 8トレンチの全様。西側断面の貝堆積



3. 8トレンチ 東側断面の堆積状態



4. 14.15 トレンチ東壁堆積状態



5. 12.13. トレンチ石積, 石組遺構(住居遺構?)を北側より



6. 12.13 トレンチ遺構を東側より望む



7. 13 トレンチの貯蔵庫用石組遺構



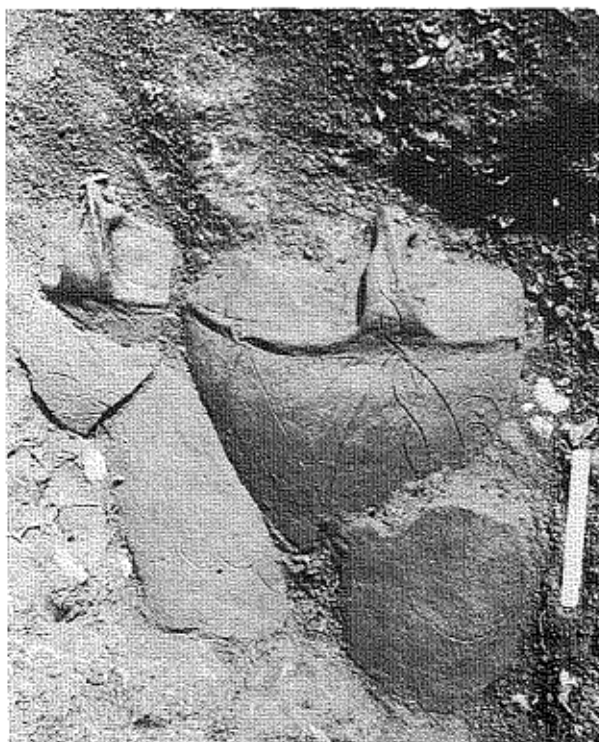
8. 9.10 トレンチK区土器出土状態



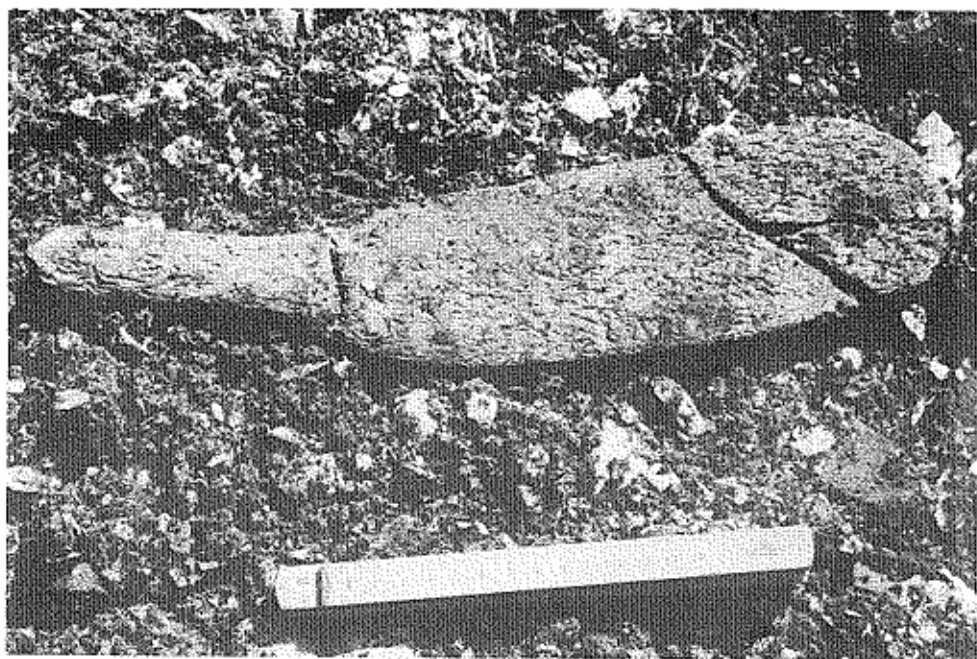
9. 9.10 トレンチK区一拵土器の出土状態



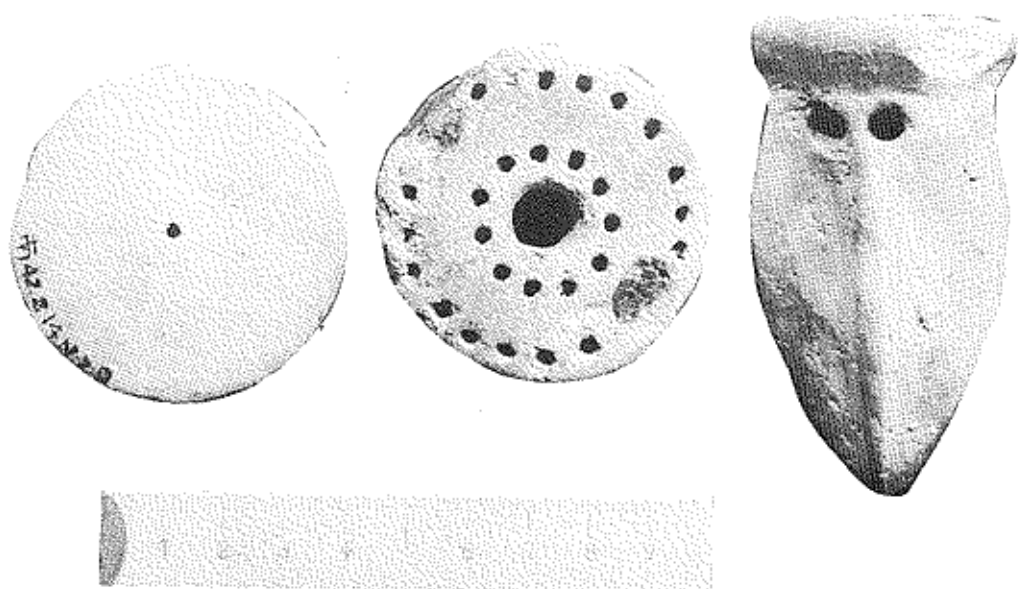
10. 16 トレンチ完全土器の出土状態



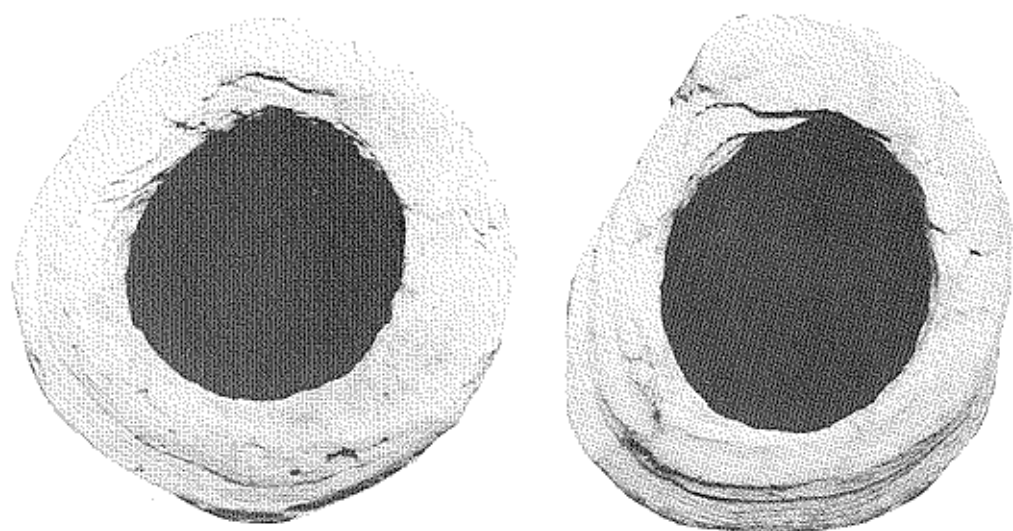
11. 12. 13 トレンチP区1 混貝層, 土器出土状態



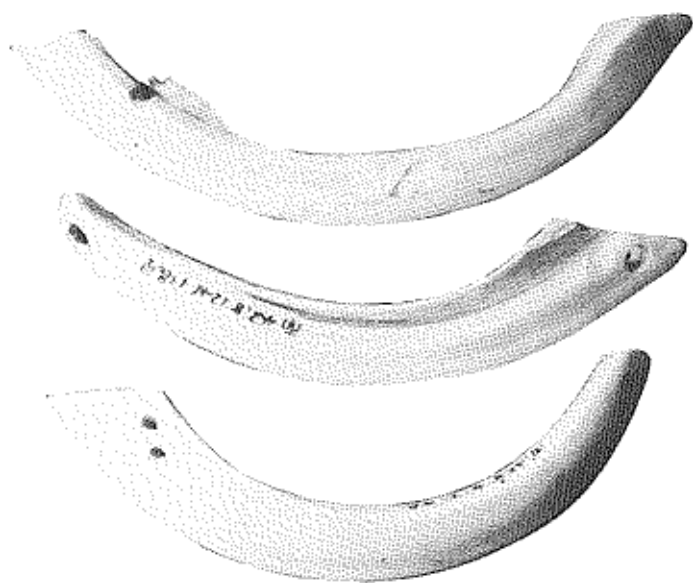
12. 9.10 トレンチN区4員肩骨角器出土状態



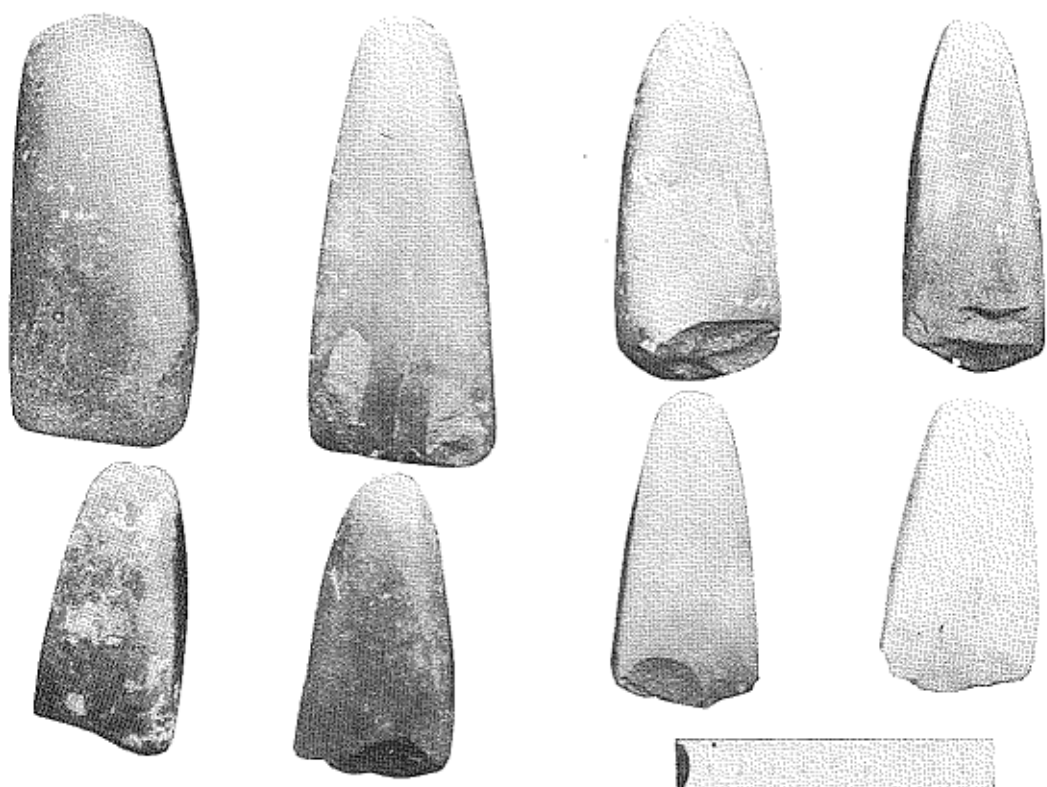
13. 土製品（耳飾，垂飾具）



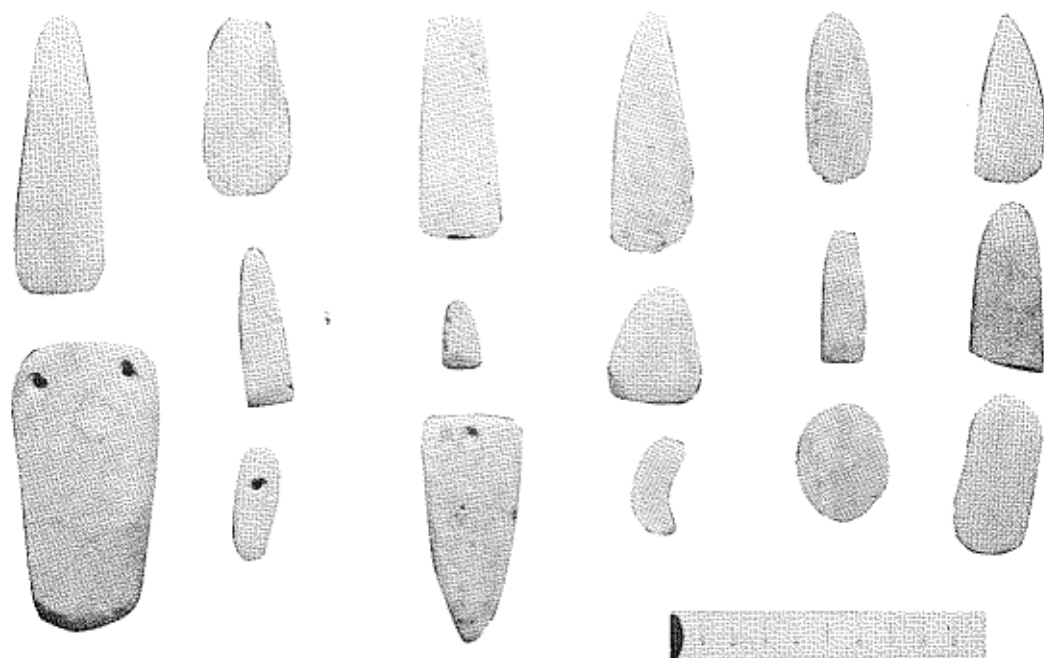
14. 貝 輪



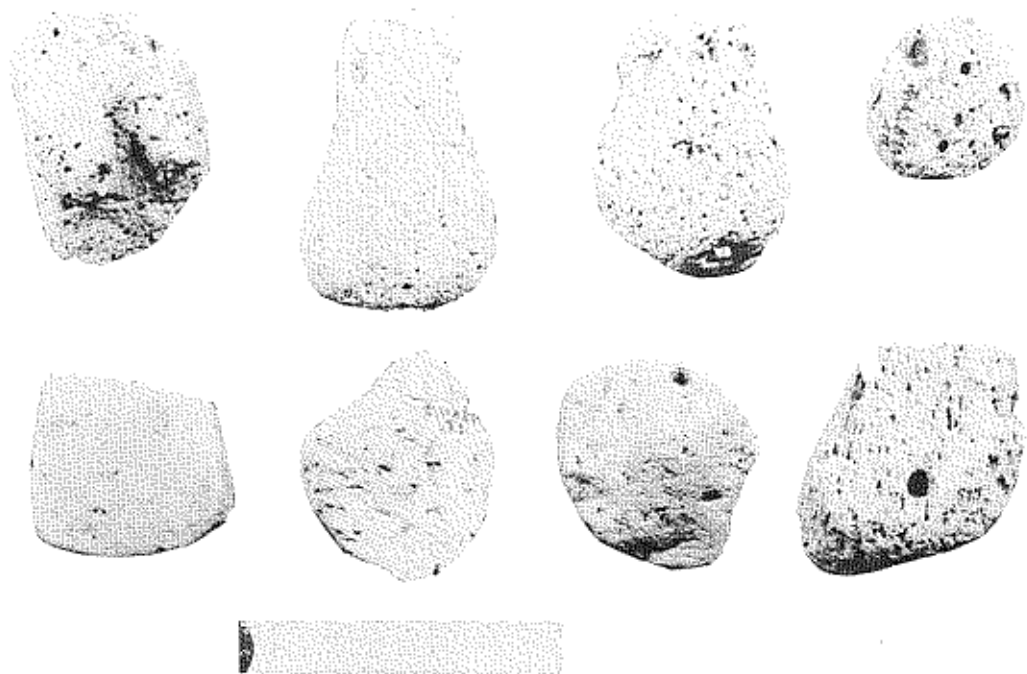
15. 牙 製 腕 輪



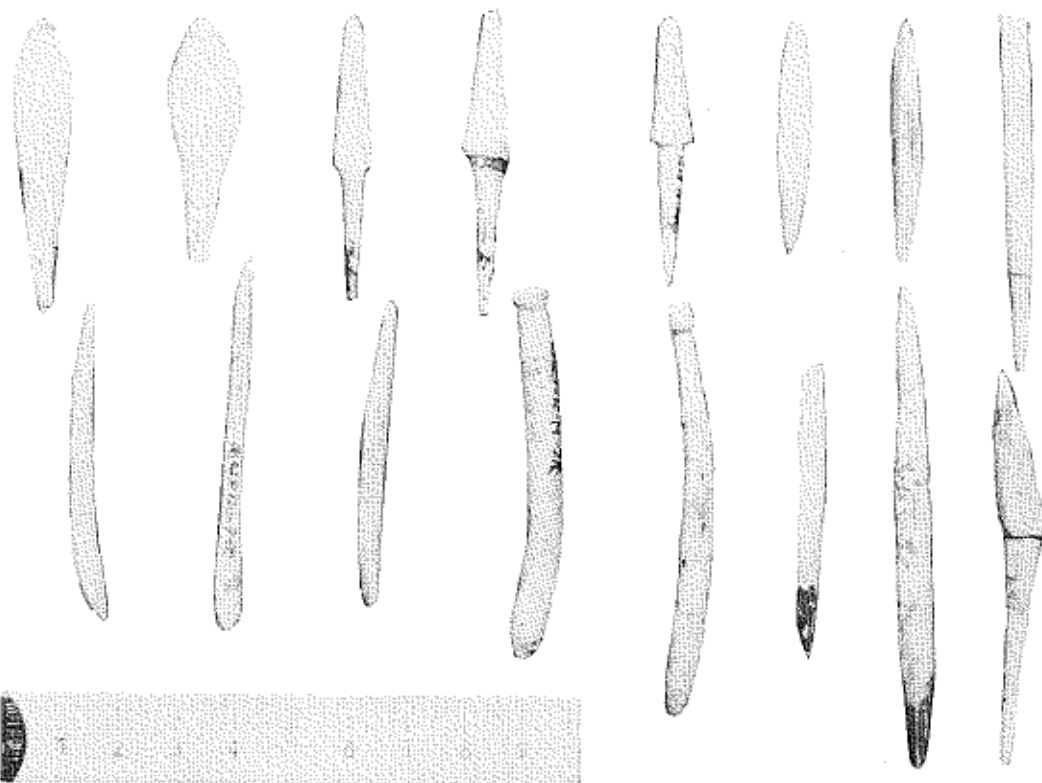
16. 石 斧



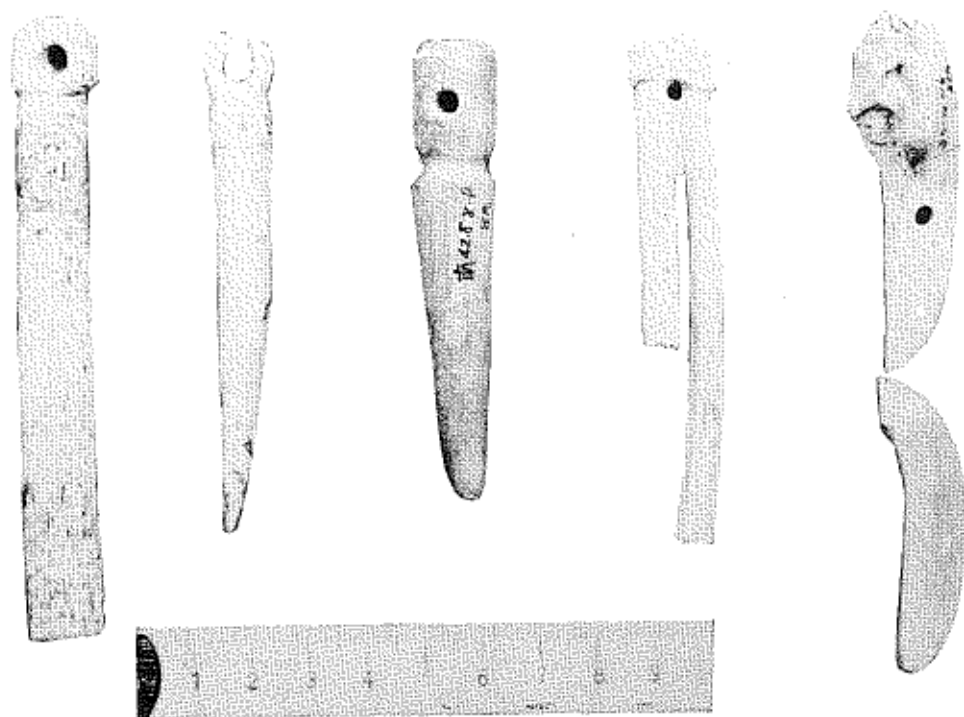
17. 擬石斧，その他



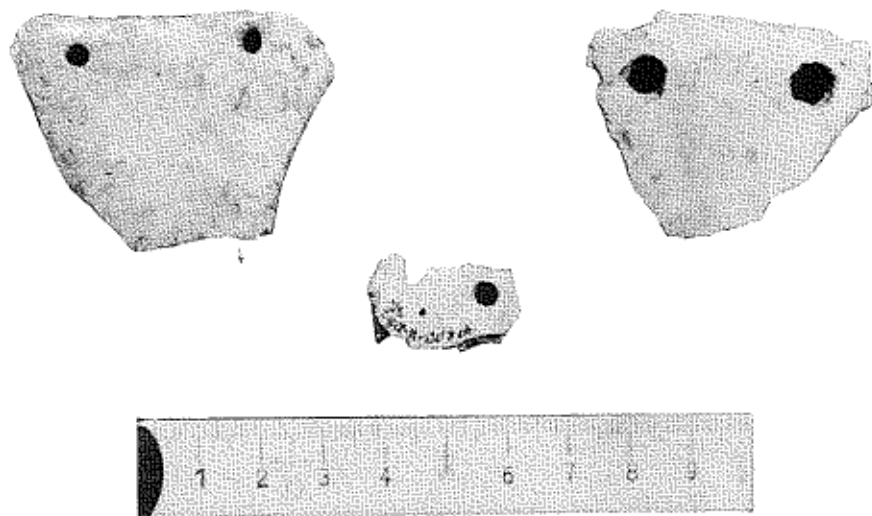
18. 軽石製浮子



19. 骨角器（刺突具）

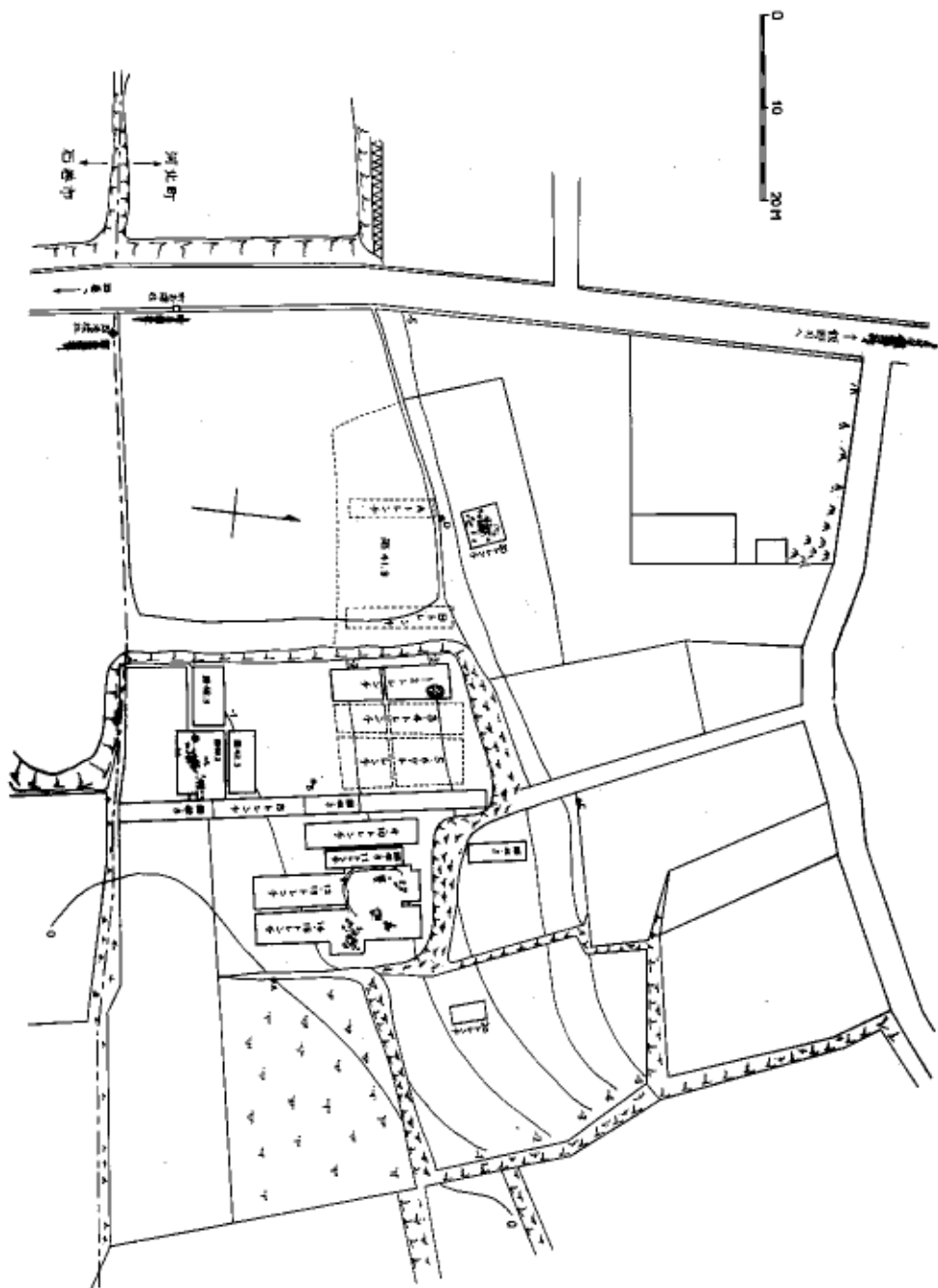


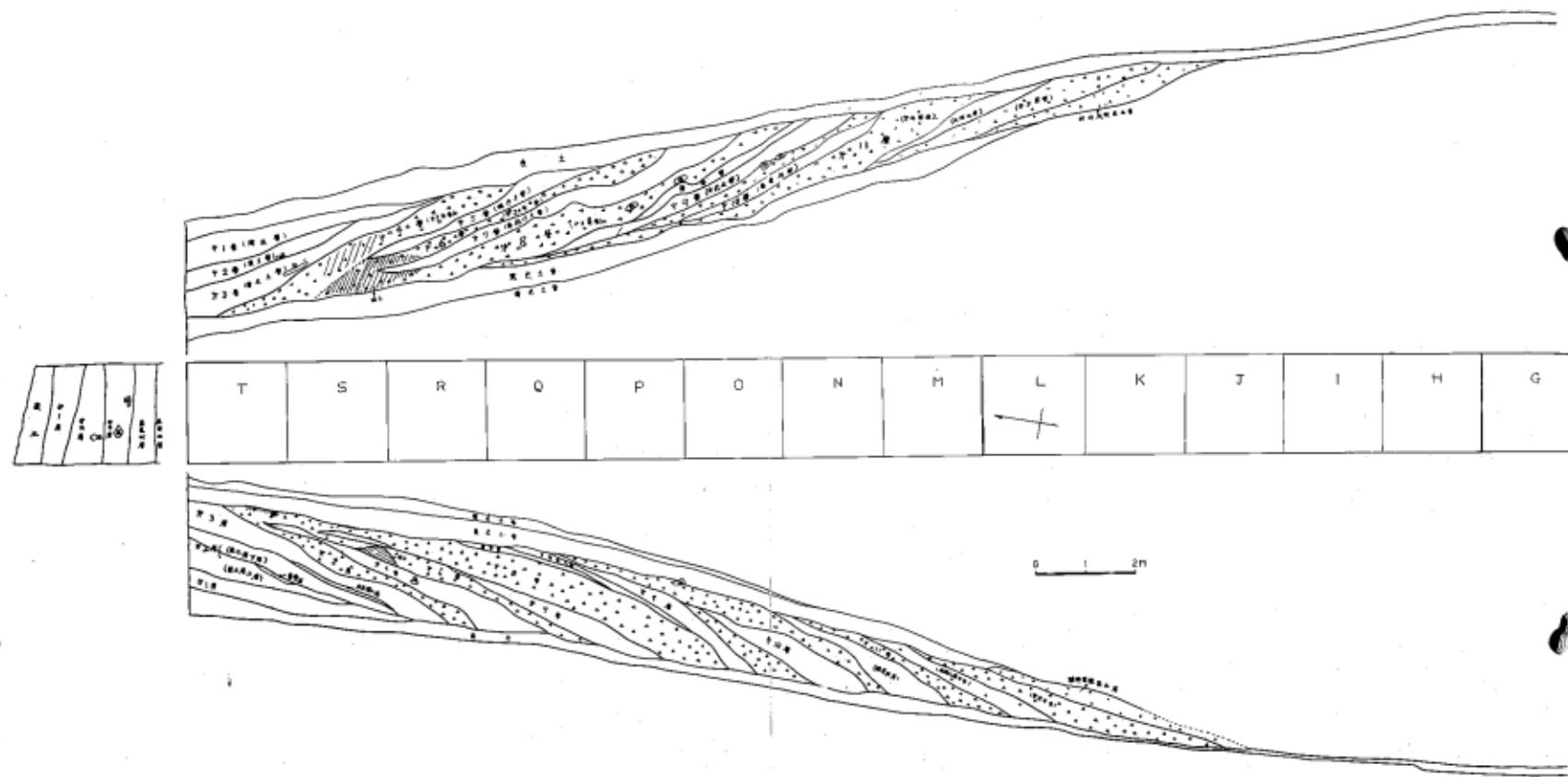
20. 骨角器（垂飾具）



21. 骨角器（魚骨製垂飾具）

第二圖 発掘地域の平仮実測図 (200:1)

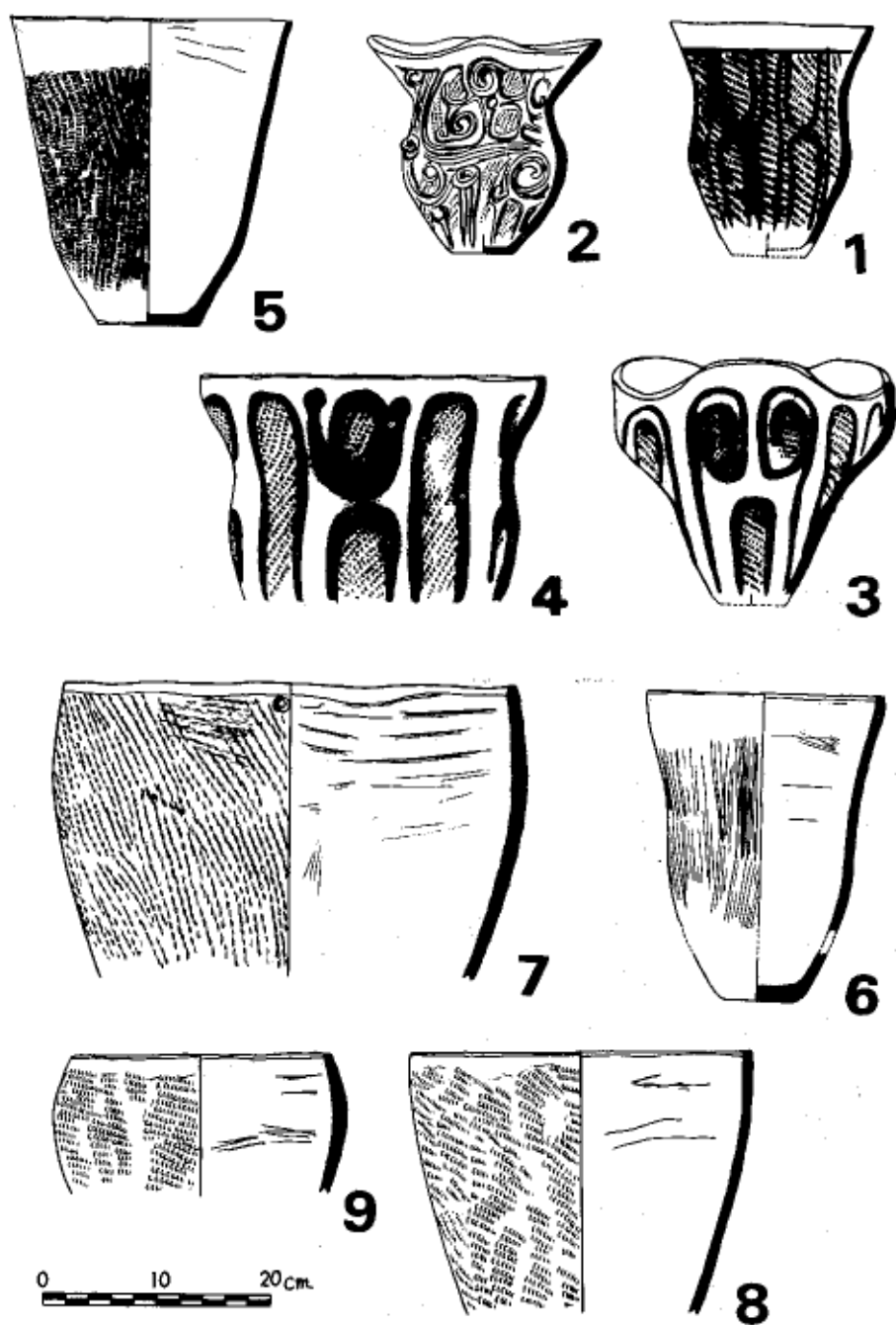




第三圖 8トレンチ断面実測図

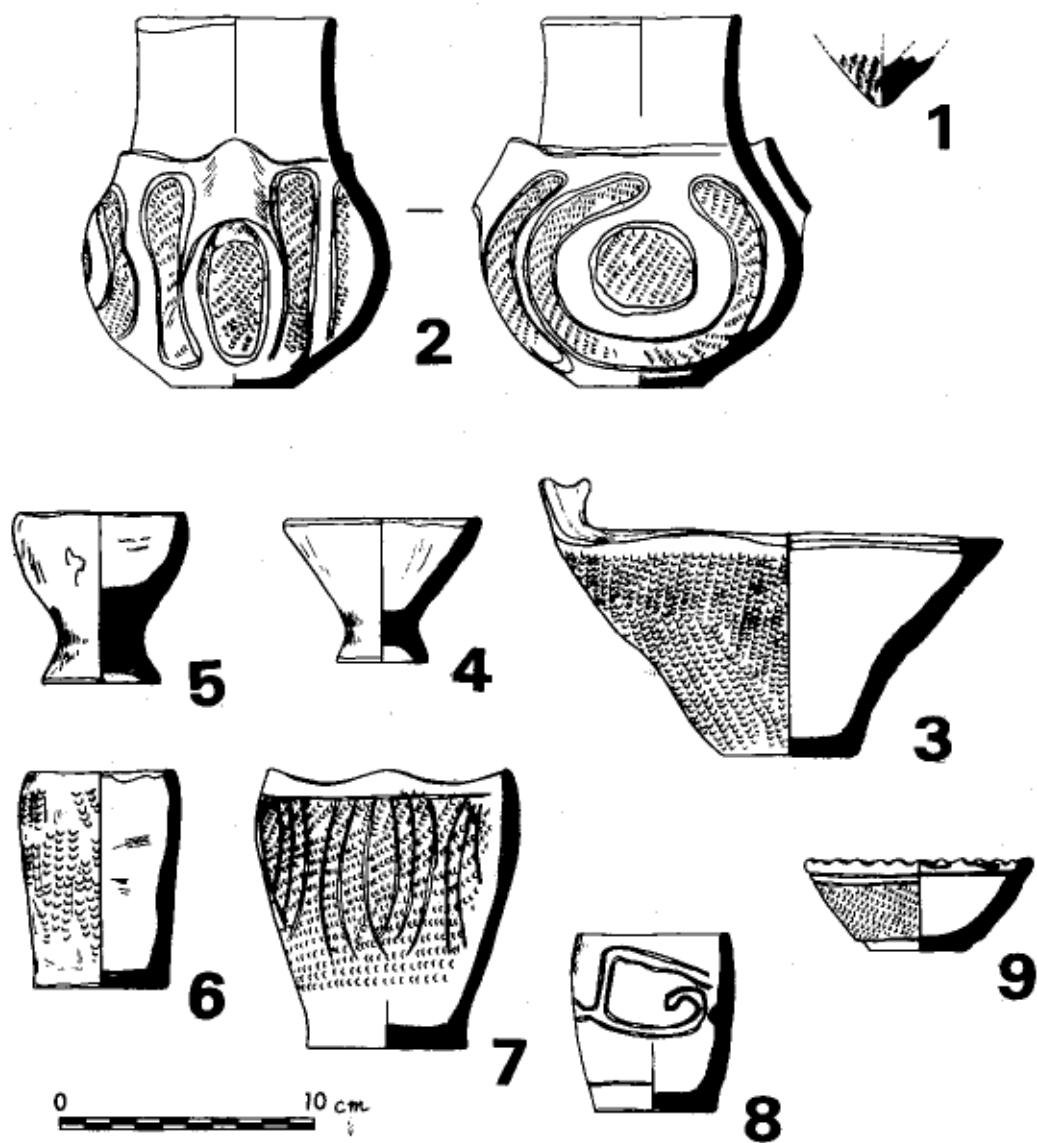


第四圖 12. 13 トロンチ出土遺構実相図



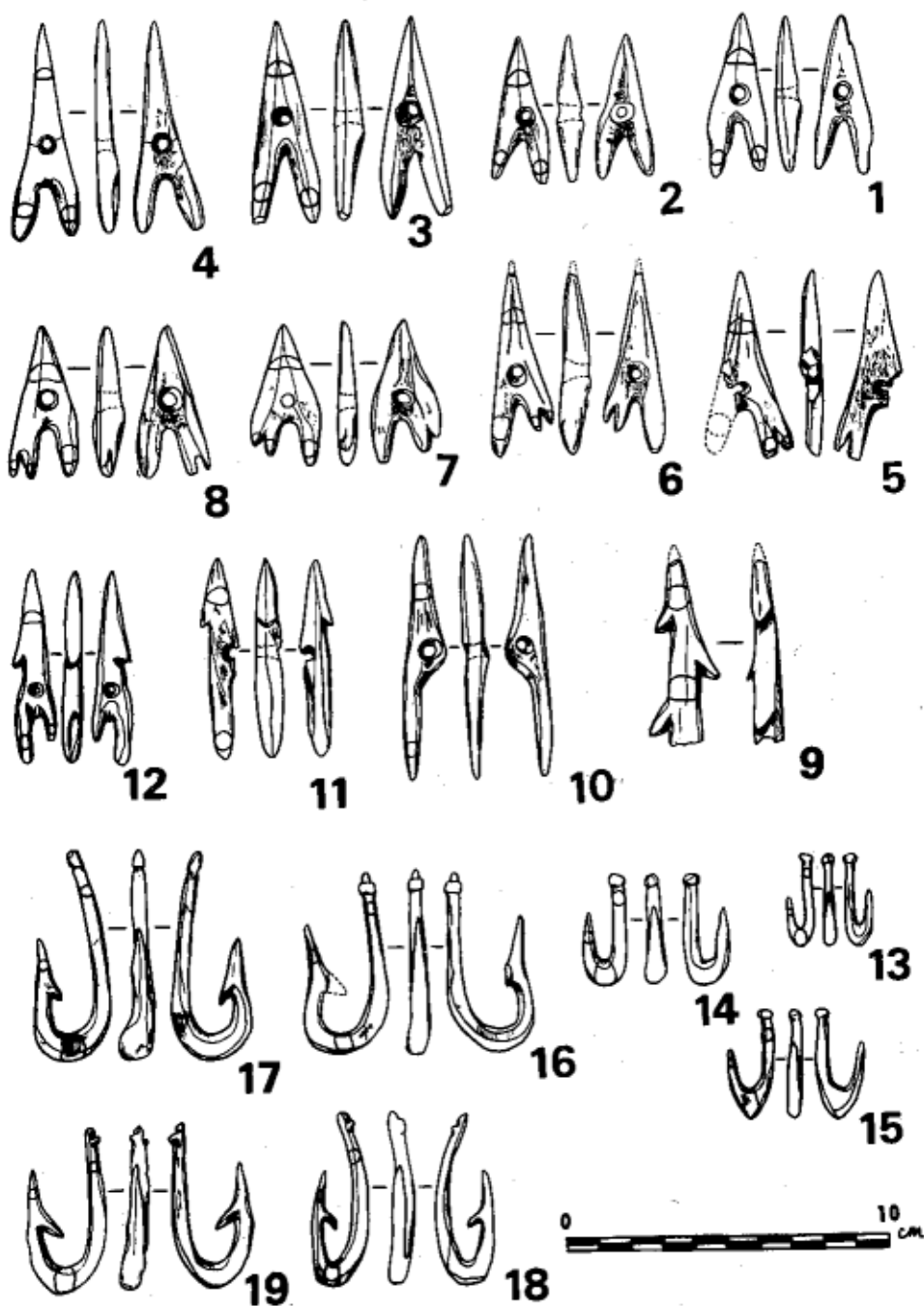
第五圖 南境貝塚各トレンチ出土土器実測図

- 1 (9.10-5月) 2 (9.10-K-5頁) 3 (8-N-11層) 4 (8-N-12層)
 5 (16-M-4頁石積上) 6 (9.10-K-5頁) 7 (9.10-O-4頁)
 8 (9.10-K-5頁) 9 (8-N-11層)



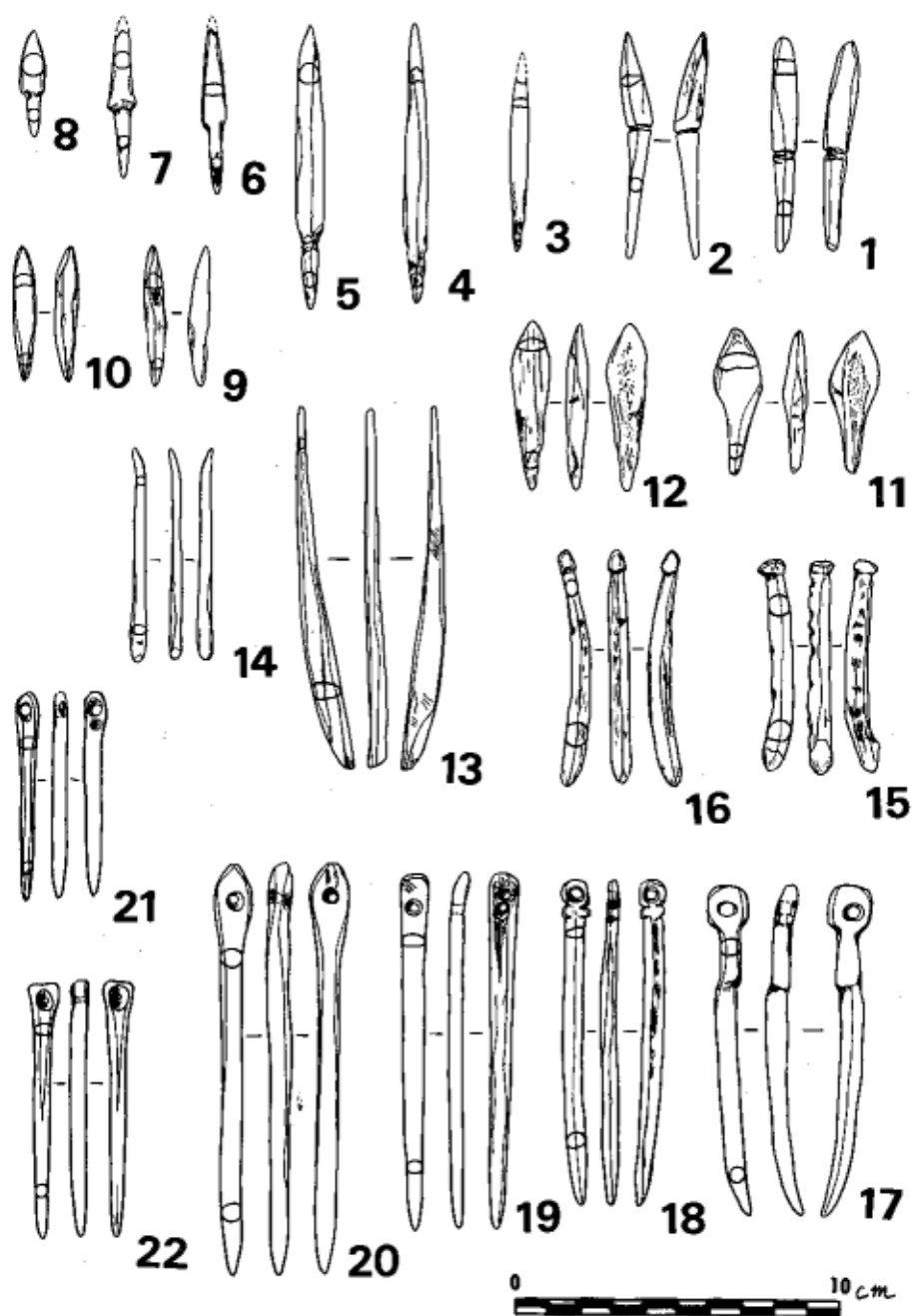
第六圖 南境貝塚各トレンチ出土土器実測図

1 (12-F-掘土印) 2 (16-M-4貝) 3 (11-5日1) 4 (9.10-O-4印)
 5 (8-T-4勝) 6 (12.13-P-2貝) 7 (30-1-貝類) 8 (1-N-掘貝)
 9 (8-T-2勝)



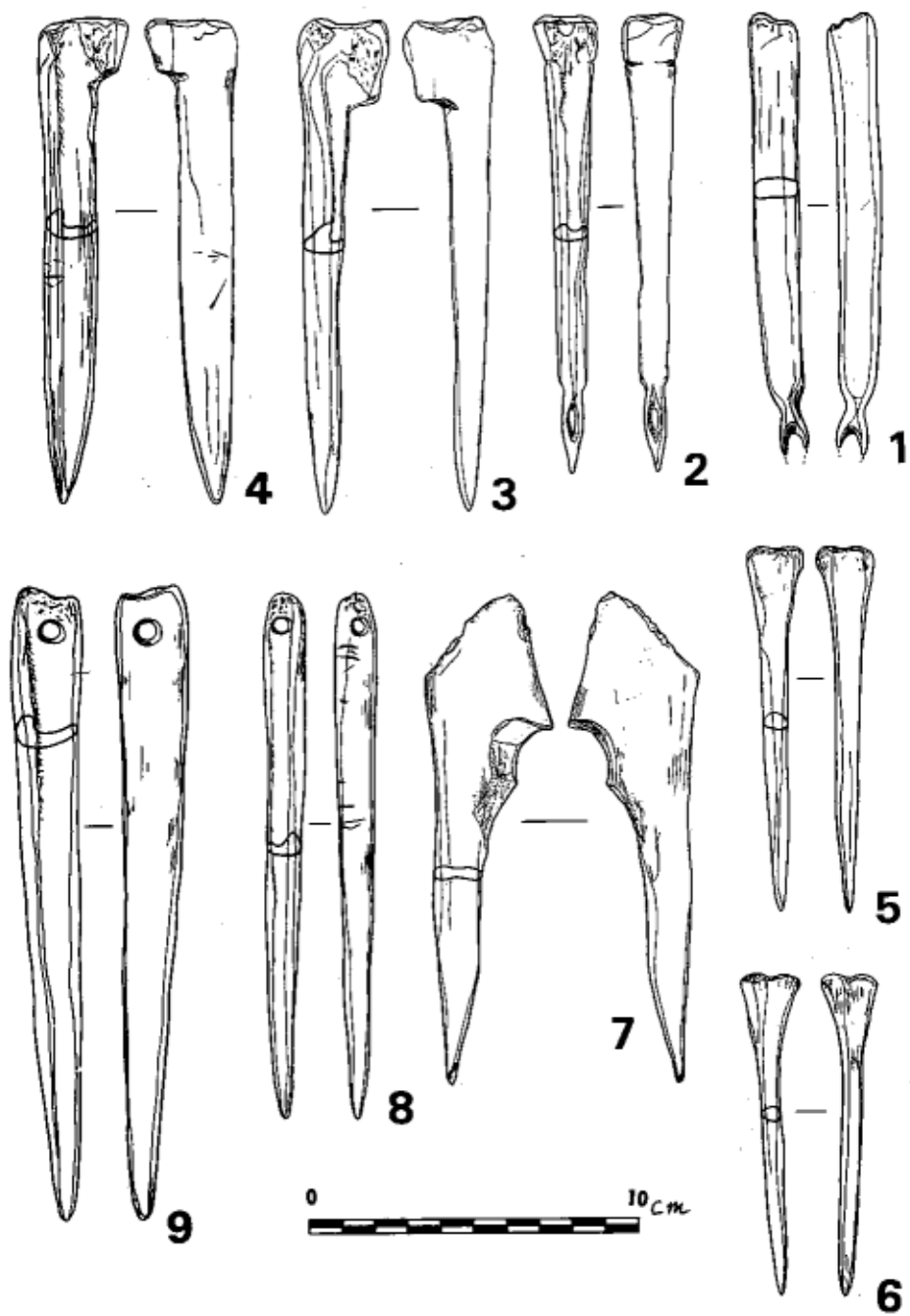
第七圖 南境貝塚出土骨角製品実測圖

- 1 (1-M-貝脚) 2 (15-N-2目) 3 (12.13-N-2泥土下) 4 (9.10-N-3灰下)
 5 (8-N-3窟下) 6 (9.10-O-表土) 7 (9.10-O-3灰) 8 (9.10-N-表土)
 9 (1-S-pit) 10 (13'-N-1泥角) 11 (8-R-2層) 12 (7-R-表土)
 13 (9.10-N-3灰) 14 (14-M-3泥角) 15 (12.13-N-2泥土下) 16 (8-O-10層)
 17 (12.13-P-2目) 18 (9.10-O-3灰) 19 (14.15-P-1泥角)



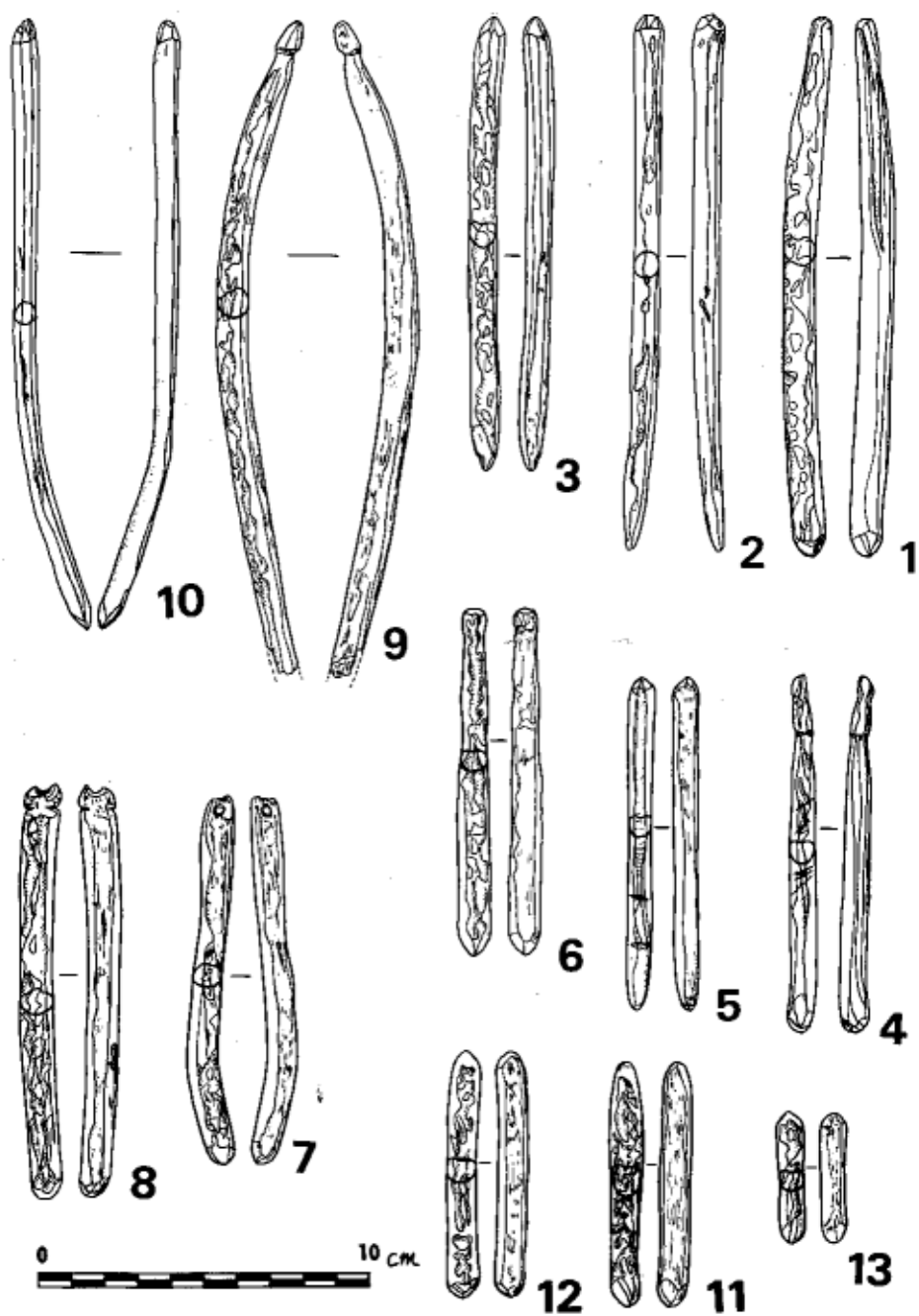
第八图 南境貝塚出土骨角製品実測図

- 1 (9.10-O-3庄) 2 (12.13-M-4月) 3 (12-O-1親刃) 4 (8-R-8副)
 5 (15-O-櫛色) 6 (9.10-P-3庄上) 7 (14.15-O-櫛色) 8 (8-S-8上)
 9 (8-N-8下) 10 (12-N-1指具) 11 (12-O-1蓋土) 12 (9.10-M-4庄)
 13 (12.13-N-3月) 14 (12.13-P-2月) 15 (12.13-M-2庄) 16 (8-O-8副)
 17 (16-M-2副) 18 (15-N-2月) 19 (9.10-M-表土下) 20 (14.15-P-1親刃)
 21 (15-N-2月) 22 (1.2-R-1月)



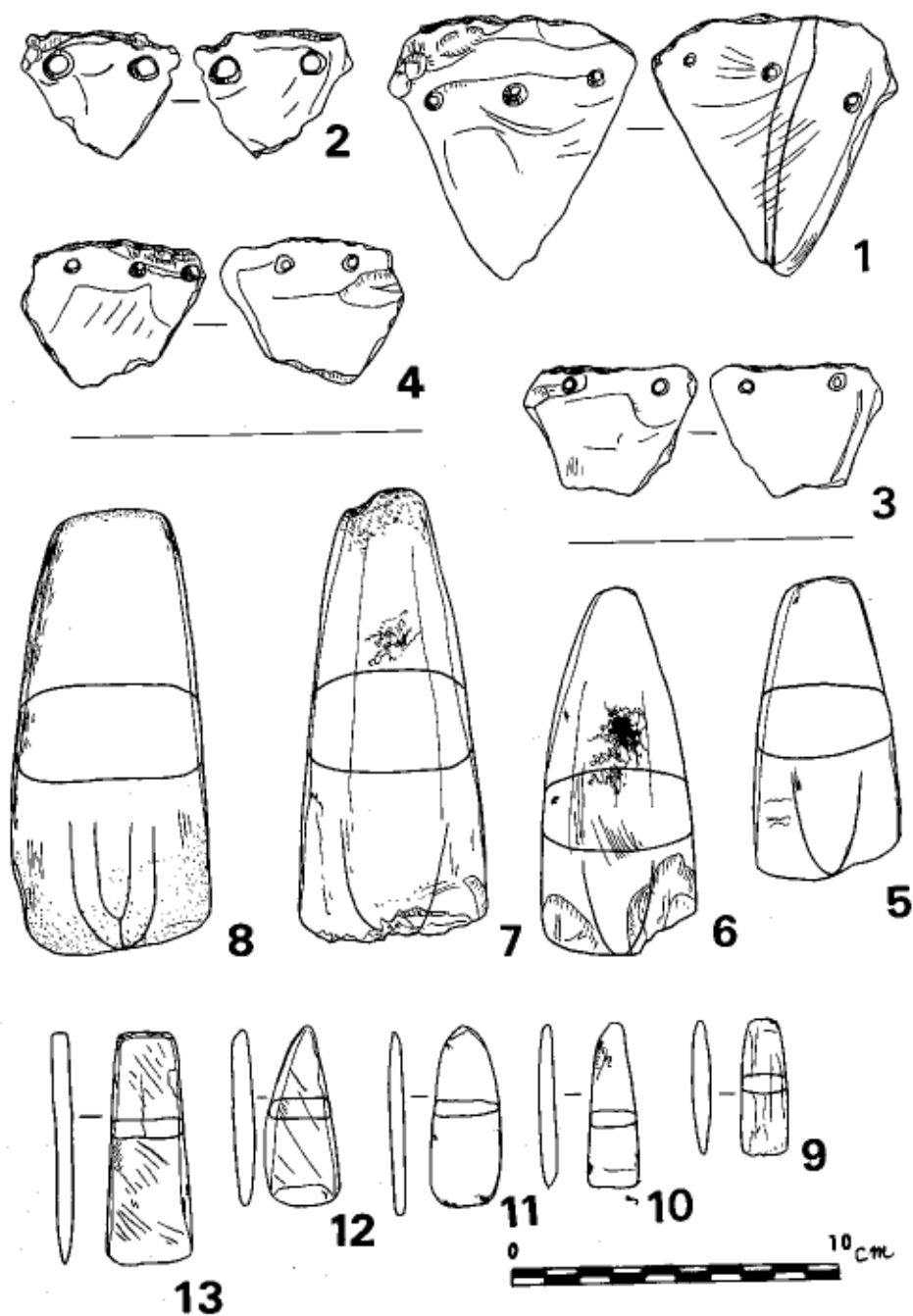
第九圖 南境貝塚出土骨角製品実測圖

1 (9.10-O-4日) 2 (9.10-O-3庄下) 3 (9.10-N-3庄) 4 (9.10-N-3庄下)
 5 (12.13-O-1掘土貝) 6 (9.10-F-3庄上) 7 (8-O-9層) 8 (15-P-2日)
 9 (14-O-4日)



第十圖 南境貝塚出土骨角製品実測図

- 1 (10-O) 2 (9.10-P-3庄上) 3 (12-M-2鹿角土) 4 (8-O-8種)
 5 (14.15-O-褐色) 6 (14-N-表土) 7 (12-N-1鹿角) 8 (15-N-2貝)
 9 (8-N-10種) 10 (10-P-表土) 11 (12-L-シツク種) 12 (12-P-1鹿角土)
 13 (7-S-表土)



第十一圖 南境貝塚出土骨角製品及石製品

1 (14-O) 2 (12-N-1號段) 3 (8-P-6段) 4 (發掘) 5 (9.10-4段)
 6 (8-8段) 7 (9.10-O-3庄上) 8 (13-O-2段) 9 (9.10-P-3庄)
 10 (12-O-3號段) 11 (9.10-N-4段) 12 (9.10-P-表上) 13 (16-M-4段上)